
ショート・ショート トキアンナイト 掟破り

陽炎埜夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シヨート・シヨート トキアンナイト 掟破り

【Nコード】

N9813I

【作者名】

陽炎埜夜

【あらすじ】

幾度となく繰り返される、恋人たちの葛藤。その一つ一つは、誰にも予想のつかない、恋人たちのドラマ。「都合のいい女」と罵倒されながらも、一緒に朝を迎えてしまうカップル。「赤いパンプス」で、勝負に出る女……。

プロローグ ハル・デイ・ゼール（前書き）

都会を舞台に繰り広げられる沢山の人間模様。その多くの無名の主人公たちのドラマを、ショートストーリーで纏め上げました。

ブローグ バル・デイ・ゼール

その日、ジュンは、フランスの片田舎バル・デイ・ゼールに向かっていた。旅の目的は、スキー場の撮影。本業はフリー・ライターなのだが、そこでのジュンはカメラマンだった。経費の都合から、本職のカメラマンを雇うと10日間の撮影で50万円はかかることを、アゴ・アシつきで15万円の破格のギャラで引き受けた。コ―ディネーターと編集者の二人とは、スイスの空港で落ち合うところになった。成田から10時間あまりのフライト。飛行機の窓の下には、早春のツンドラ地帯の氷の世界が広がっていた。

地元出身のコ―ディネーターのクリストフの尽力で、撮影は順調に進んだ。また、撮影期間中の宿は、クリストフの一家が経営するブチ・ホテルに世話になった。そのスタッフとも、親しくなった。そんな、気持ちに余裕が出てきたころ、ホテルのスタッフと一緒に食事に行くことになった。クリストフの姉、カトリーヌと日本人スタッフの玲子と千草。そして私である。5月上旬のフランスは、夜9時過ぎに日が落ちる。まだ明るい午後8時に待ち合わせ、スキー教室のスター・コーチのケリーが経営しているイタリアン・レストランに入った。

「料理は肉料理」、と4人で決めたあとでワインを選ぶとき、カトリーヌが強く白ワインを主張した。しかし、私を含む日本人3人は、「お肉には、赤でしょう」

と杓子定規に赤ワインを主張した。結局、白ワインになった。選択は、正解だった。

食事も弾んで宴も半ば、千草がカメラマンだと思っているジュンに質問した。

「ジュンさんは、目標みたいなものとか、持っているんですか」

と、聞かれた。フリー・ライターのジュンとしては、前もって“そういう質問には、こう答える”と決めていたので、

「小説家」

と応えた。さらに続けた。

「最初のころは、沢木耕太郎みたいなジャーナリストになりたいと思っただけけど、今は違う。小説を書きたいと思ってる」

「どんな小説ですか」

千草は、興味津々という瞳で質問を続けた。

「最初はハードボイルドを書いて、最終的には、山本周五郎みたいな、時代小説を書きたい」

「山本周五郎というと、庶民の目線から時代を捉えていくというのがテーマなんですよね」

と、千草。そこへさらにジュンがおおいかぶすように、

「時代小説も現代小説も、テーマとしているところは人間。ただ、現代小説はディーテイルに引っ張られて人間性を表現するという点で弱くなる。一方の時代小説は、ディーテイルに捕らわれることはない。その分、人間性の表現の良し悪しがはつきり出てくる。千草さんは、何か目標としているものはあるんですか」

千草は、ワイングラスを置いた。

「私は、この街のいいところを、沢山の人に教えてあげたいんです。だから、今の仕事に満足しています。スキーがこんなに楽しくて、お料理も、こんなに素敵で。でも、ここのイタリアン料理には、お魚があんまりなくて。お魚があれば……」

カトリーヌにジュンは、同じ質問をした。するとカトリーヌは、
「私も、小説家になりたいと思っってます」

クリストフの姉、カトリーヌの年齢は20代後半。

「何か、書いているんですか」

ジュンが続けた。しかし、カトリーヌからは、意外な答えが返ってきた。

「いいえ、書いていません。でも、50歳になったところに、小説を書こうと思っているんです」

「それは、どうしてですか？」

今度は、ジユンが、興味津々になる番。

「それは、50歳になれば、人生で沢山のことを経験して、いろんなことを分かっていると思うんです。そんな年齢になっていけば、書く小説にも奥行きと幅が出てくると思うから」

その答えを聞いて、ジユンの中の何かが弾けた。

新しい恋(前書き)

男と女、どっちが生物として強い？
そして、どっちが恋愛上手？

新しい恋

20歳台前半の若いカップルが、夜半過ぎ、タクシーに乗り込んで来た。走り出してしばらくすると二人は、遅めの晩御飯の相談を始めた。

「ねえ、何にしようか」

と、女が男に話しかける。男は、少し疲れた様子で、気のない返事を繰り返す。

「うん。そうだな……」

二人の会話は、いつしか関西弁になっていた。

「オリンピックで、ええやろ」

「うん……」

男は、相変わらず気のない返事。それに比べ女は、元気がありあまっている様子。

「この間の話しなあ……。どないしたらええ？」

「そっやなあ、うん」

男は、結構、いい男のだが。女の前では、どちらかというと無気力とか、疲れている風を気取っている。ありがちな男の態度。どんなきっかけからだったかは、はっきりしないが、女はタクシードライバーに語りかけていた。しばらくしてタクシードライバーが、彼女に聞いた。

「関西の方ですか」

「そう、大阪。最近、東京に出てきたん」

「東京は、どうですか」

「なんか、みんな忙しそうで、急いでいて。疲れるわ」

「ええ？ 大阪だって、東京と大して変わらないでしょう」

「そんなことない。東京よりも、もっと、のんびりしているわ」

「そうですか。大阪の人でも、東京はあくせくしている感じですか」

「ねえ、四国は × 、どう？」

と、女が男に声をかけた。男は四国の出身らしい。声をかけられた男は、

「……………」

答えをうやむやにしたまま、静かになった。女がまた、ドライバーに声をかけた。

「うちら、まだ知り合って2ヶ月」

「いいですね、若いつて。沢山恋愛をして、沢山経験を積んで。沢山、男を知って……………」

タクシー・ドライバーは、これといった意味もなく、よくありがちな答えを返した。

しかし、女は、“我が意を得たり”とばかりに、

「そうですよね。私、沢山恋愛しなくちゃ」

といつて、女は男の方を見た。そして、

「沢山、恋愛して、いい？」

と、いたずらっぽい視線を、男へ向けた。

「……………」

男は、返事に詰まった。女は、そんな男の態度に対して得意気に、「大丈夫！」

と、いったんは男の機嫌を取っていたが、バックミラー越しにドライバーへ送った視線の瞳は、茶目っ気たっぷり、含み笑いを返していた。

程なくして、車はスーパーの前に着いた。車から降りた女の左手は男の手をつかみ、その右手はスーパーの買い物籠をつかんだ。

“男の未来に幸多からんことを”と、タクシードライバーは、他人事ながら祈っていた。

捨てられた女は“都合のいい女”（前書き）

ライブハウスの前から、男に放り込まれるようにしてタクシーに乗せられた女。走り出した車の中で女は、大声で泣き始めたのだった。

捨てられた女は“都合のいい女”

深夜午前1時過ぎ。ライブハウスの前で、男が酔った女を介抱している。“モテル男も大変だな”と思いつつも、タクシードライバーは手を上げた男の方へと車を寄せて行った。女の様子が、ちょっと違う。車を止めてドアを開けた。男が女を抱えるようにして、車に乗せた。男も乗ってくるのだろうと、ドアを閉めるタイミングを計った。しかし、男は車に乗ることなく、「運転手さん、王子まで」といって、ドアを閉めるしぐさをした。男は、乗って来なかった。

ドアを閉めて車を走らせると、女が、ロレツの回らない口で話し始めた。

「わたし今、彼氏に捨てられたんです」

そういうと女は声を抑えることなく、大声で泣き始めた。

「運転手さん、すみません」

といって、平静さを装おうとするが、

「ヴァーン、ヴァーン」

と、再び泣き叫び始める。

「大丈夫！ 泣きたいときは、泣いた方がいいんです。車の中だから、聞いているのは私だけ。好きなだけ、泣きなさい」

といって、運転手は、少し開いていた車の窓を閉めた。

女は涙でしゃくりあげながら、少しづつ話し始めた。

「彼のライブに行ったら、“帰れっ！”ていわれて。私、それで、やけになって、お酒を一気に飲んじゃって」

そういうと女は、再び泣き叫んだ。そしてしばらくすると、また話し出す。

「彼、私のことを、“お前は都合のいい女だ”なんて、いったんですよーっ。ヴァーン」

泣き叫びながら女は後部座席からズリ降りて床に座り込み、ドア

にもたれかかっている。外から女の姿は見えない姿勢になった。それでも女は、さらに続けた。

「彼とは、もう4年くらい付き合っていて。いっぱい尽くしてきたんです。なのに、突然、捨てられてヴァーンツ」

「男なんて、6000万人いるんだから、彼女ならすぐいいのが見つかるよ」

運転手は、ありきたりの言葉で慰めてみる。

「そんなことないです」

「彼女なら、大丈夫だって」

「ヴァーンツ」

女を慰めているうちに、車は目的地に着いた。車の床に座り込みながらも、女は料金を支払い、領収書を受け取った。女が車から降りる間際、

「なんかあったら、ここに電話してください。忘れ物でも、なんでも」

運転手は、そういつて女に名刺を渡した。女は名刺を受け取ると、駅の方へと歩いて行った。

翌日の昼近く、仕事を終えて家で体を休めていた運転手のところへ、携帯電話が鳴った。電話に出ると、昨夜の女からだった。

「家に帰ったら、携帯の電話番号を書いた名刺があったんですけど。なにか、ご迷惑をおかけしましたでしょうか」

「いや、別にないですよ。昨夜は、あれから、ちゃんと帰られたんですか？」

「はい、何とか家にたどりつきました。どうも、ありがとうございますました」

「そりゃあ、よかったですね。で、彼とは……」

「ええ、なんとか。今は部屋で寝てます」

「そうですか。そりゃあ、よかったですね。まあ、お二人、仲良く」「はい、ありがとうございます」

運転手は、一気に脱力感を覚えたのだった。

その大胆さに、惚れました（前書き）

深夜、ホテルの裏通りから乗り込んできたピンクのミニスカートの女性。「あなたの思っている所と私の思っている所とは、一緒だと思っ」の一言で、タクシーは走り出した。

その大胆さに、惚れました

高輪プリンスホテルの裏道で、若い女性が手を上げた。時間は深夜の2時を回っている。タクシードライバーは、車を彼女の方へと寄せた。乗り込んで来たのは22か23歳くらいの女性。ちよつとガツチリした感じなのだが、ピンクのミニスカートに白いブーツという服装。座席に座るなり彼女が言った。

「六本木で火事になった女性専用のスパがあつた所」

と彼女は行き先を告げるのだが、タクシードライバーの彼には、まったく見当が付かない。

「運転手さん、わからないかな？」

そついわれて、スパで火事になったところというと、渋谷の温泉でガスが貯まつて爆発した所くらいしか、彼には思い浮かばない。

「六本木通りなんだけど、エーライフって言うクラブ」

彼女は説明を続けるが、それでも彼には分からない。「エーライフ」という名称を耳にしたのも、このときが初めてだった。しかし、なんとなく、最近人気があつて人だかりが出来ているスポットというと、六本木通りで一箇所だけ、彼の脳裏に浮かんだ。それで、彼は彼女に言った。

「エーライフかどうか分かりませんが、たぶん、あそこじゃないかというお店があるんで、行ってみますか」

というと、彼女は笑顔で、

「運転手さんの思っている所と私の思っている所が一緒だと思う。行ってみましょう」

と、大胆な発言。タクシーは一路、彼女が言う「運転手さんの思っている所と私の思っている所が一緒だと思う」という場所に向かった。そして着いてみると、

「ここ！ここよー！あつ、ちよつと待って。運転手さんにとつて私はラッキーガールだと思う。ほら、次のお客さんが待ってる！」

と、まさに次のカップルのお客がドアの脇で、彼女が下りるのを待っていた。

タクシードライバーの彼は、車から降りて歩き出したピンクのミニスカートのガッチリした体系の彼女から、しばらくの間、視線を離せなかった。

女はチャツカリ、男は愛嬌。絞めて3500円、カードで（前書き）

六本木のクラブを堪能したカップル。その帰りのタクシーで、ど
うも雲行きが……。

女はチャツカリ、男は愛嬌。絞めて3500円、カードで

前の女性客が車を降りると同時に、若いカップルが乗り込んできた。

25、6歳の男女のカップル。女性は、タレントの優香みたいでかわいいタイプ。

「運転手さん、戸越銀座と横浜」

と乗り込むと即座に、元気な女性の声。比べて男性は、
「横浜まで行こうかな」

と、タクシーが動き始めても考えている。

「ビーに來ているお客は、どうもね」
と男性。

「でも、お店に來ているお客の考え一つで、評価は違っんじゃない」と女性。

「女の子も、もまれて、触られて、ごちゃごちゃで」

ネガティブな男性。それに比べ、ポジティブな女性。

「運転手さん、そこ右入って。ねえ、ローカルな感じでしょ」

「そうだね。どうしようかな、横浜でなくて、五反田のインターネッソトカフェにしようかな。五反田にあるかな？」

と女性に聞く男性。

「五反田なら、あると思うよ。運転手さん、ここで一人降ります」
女性がさつさと一人でタクシーを降り、男性一人が後部座席に取り残された。

タクシードライバーが声をかけた。

「どうしますか？ 横浜？ それとも五反田？」

「五反田で」

「では、五反田へ。なんだねえ、お客さん。そのまま彼女の家に、上がり込んでやればよかったのに」

と、タクシードライバーが一言感想を漏らした。

「ぼくも、そうしたかったんですけど。でも、僕、気が弱くて」「押しの手ですよ。」

「でも、あそこは彼女の実家だから」

「そうですか。ならホテルとか」

「そうですね」

そんな話をしているうちに、タクシーは目的地に着いた。

「五反田の駅前です。色々ありますよ」

と、タクシードライバー。

「じゃあ、ここで。支払いはカードで大丈夫ですか？」

といって、男は一人で五反田の駅前に消えて行った。六本木、戸越銀座、五反田、占めて3500円。

世界が僕を求めている！ その瞬間を君と迎えたい（前書き）

口説き文句で、これ以上の口説き文句はない。そんな口説かれ方をしたあとなのに、なんで、そうなるの？

世界が僕を求めている！ その瞬間を君と迎えたい

六本木の星条旗通りからタクシーに乗り込んだカップル。

「飯倉片町まで」

と、超近い。星条旗通りから外苑西通りに出て西麻布の交差点から六本木通りに入り、六本木の交差点を右に。相変わらず、大渋滞。男性。

「世界が僕を必要としていると、今感じている。これは、現実のものになる。その瞬間を君と一緒に迎えたいんだ」

すばらしい口説き文句だ。こんな口説き文句を聞いたことはない。ましてや、想像したこともない。男として、最高の口説き文句じゃないか。当然、タクシーという密室ですから、口説き文句のあとはキスです。

そんな熱い口説かれ方をしたあとなのに、相手の女性が、
「運転手さん、混んでるわね。私だったら、すぐに六本木ヒルズの方へ右折して、赤羽根橋方面に出て、飯倉片町に出るのに」

と、冷やかな声。対して男性は、
「運転手さんも、気を使ってくれているんだよ、僕たちのために」と、すばらしいフオロー。

“この男性なら確かに、世界が待ってくれるでしょう”
と密かにタクシードライバーは感動。

一方、女性を一人で降ろした男性は、

「ホテルへ」

と、すぐ側のホテルの名称。“ホテルで一人暮らしなら、連れ込めば良いのに”と思うのは、下世話な考え。そうしない所が、さすがに、“世界が求めている男”なんだなと、タクシードライバーが一人で納得した夜でした。

2年前の冬のじと(前書き)

2年前の冬のこと

「今から、帰るね」

「迎えに行くよ。今、どのあたりにいるの」

「バスを降りたところ。大丈夫、休み休みで、帰るから」

そういうと、電話は切れた。歩いて帰ってくるという彼女の言葉を、そのまま鵜呑みには出来なかった。電話を切ってから、私は迎えに行く準備をした。

パジャマを着替えて、車を出した。電話を切ってから15分ほどたっている。彼女が歩いてくる道は、大体分かっている。探しながら、車を走らせた。道端のガードレールに手を着いて、息苦しそうにしている彼女を見つけた。肩で息をしている。

彼女の前を通り過ぎ、その先でユーターンをして、すぐ側で車を止めた。夜の7時を回っている。あたりは、真っ暗だ。街路灯の下で、車を見つけてからも、彼女はしばらく呼吸を整えるのに、動けないでいた。

男は胃袋を掴め（前書き）

中野の路地裏で乗せた女は、一見、クリエーター系の黒いコート
の似合う女だった。「母から言われたのは、男は、胃袋を掴め。も
う一つは、年齢は関係なく遊び盛りを終えた男を選べ……」

男は胃袋を掴め

一台のタクシーが中野駅に近い裏通りに入った。暗い路地の影で若い女が手を上げて車を止めた。長めの黒っぽいコートに、長い髪。一見すると、クリエイター系の仕事をしている気難しいそうな雰囲気。気の女だった。運転手はドアを開け、彼女を乗せた。

「どちらまで？」

「歌舞伎町」

女からは、意外な答えが返ってきた。

「私、お弁当、作ったんです」

突然、女は屈託のない明るい声で話はじめた。運転手は、女の言葉にまごついてしまった。とりあえず、

「お弁当ですか？」

と、復唱した。

「六種類も作ったんです。レンコンのひき肉詰め、ピーマンのひき肉詰め、それからきんぴらに、グラタンに、全部で6品も作ったんです」

「そりゃあ、すごいですね」

女の年齢は22、3歳くらいだ。

「そう、大変なんです。ワンルームマンションだから、ガスレンジのコンロが1台しかなくて」

「そりゃ大変だ」

「今から、このお弁当を彼の所に届けるんです」

「彼氏が、うらやましいねえ」

「今日は、私のお仕事が終わったんで。なかなか、こんな時間にお仕事が終わることなんてないから」

時間は、午後8時くらいだ。

「そうなんですか」

運転手は、そう応えながら、ウインカーを出した。女は話を続け

る。

「彼の職場、若い男子ばかりだから、お肉をメインにしようと思っ
て。でも、私、お肉ダメなんです。皮肉でしょ。なんとかひき肉だ
けは大丈夫なんだけど」

「それじゃあ、困っちゃいますよね。でも、彼女の彼氏は幸せ者で
すね」

「いつも、お母さんに言われていたことが、3つあるんです。一つ
は、“男は胃袋を掴め!”、もう一つは“男は、何歳でも遊びの盛
りを終わった男を選べ!”」

「失礼ですが、僕、遊びの盛りを終わってます」

「あと一つは、“借金のない男”」
「確かに」

運転手は“この女の母親は、若くして男と離婚しているんだろう
な”と想像した。

「でも私、男の人は外見じゃないと思うんです。やっぱり、男の人
は内面ですよ」

「そうそう、やっぱり男は内面ですよ。僕、内面はイケメンです」

「よくいうでしょ、美人は飽きてしまっつて。男も一緒。イケメン
は、やっぱり飽きるでしょ」

「そう、その通り! 美人は3日で飽きる、ブスは3日で慣れるっ
てね」

「そうなんですか」

ちよつと、彼女の反応が止まった。運転手は、話を続けた。

「でも、彼女みたいな料理上手は、いいんですよ。昔から、“料理
上手は床上手!”ってね」

「そうなんですよ、だから、私、それを活かしています」

「それを活かしてるって?」

「それを活かして、風俗嬢やってます。評判いいんです」

「そうですか。僕も、一時期、結構お世話になってたんですけど」

“オチは、そこかよ!”と、運転手は、一人で思った。

程なくして、車は目的地に到着した。料金を払って、車から降りていく彼女の顔をまじまじと見て、ふと、運転手は思った。“もっと、大切にしてくれる男を選んだ方がいいのに……”。そして、車から遠ざかっていく彼女の後姿を、しばらく眺めていた。彼には、“もっと大切にしていればよかった”と思った人がいたからだ。

赤いパンプス（前書き）

女の心理について、ある心理学者が言っていた。「女が“勝負”のとき、“赤”を身に付ける」と。

赤いパンプス

深夜、零時過ぎ。黒っぽい上下のその女は、繁華街の裏通りからタクシーに乗った。運転手に行く先を告げると、すぐに携帯電話で誰かと話し始めた。

「今日は、早めに終わったの。そのまま家に帰ろうかと思ったんだけど、でも、そういえばあなたに話したいことがあることに気付いて。今から、そっちに行つていい？」

女は、突然思いついた用事のために、電話の相手の都合を聞いている。その話し方には、一方的な強引さを感じるが、その実、相手の真意を探り出そうとしている慎重さが感じ取られた。運転手には、その女の、男への思いが伝わってきた。

「あなたと話したいことがあるの。ねえ、今から行つていい？」

女の口調が、通達から徐々に懇願へと変わって行く。彼女はなんとかして、今日は、男に会いたいようだ。高ぶって行く“彼に会いたい！”という気持ちを、押さえ切れなくなっている。しかも、彼女の口ぶりから「話したいこと」というのは、あまり深い意味を持つていない様に感じられる。あくまで、それは、女が男の部屋に入るための口実でしかなさそうだ。二人の関係はまだ、男に会うために口実を必要とする間柄のようだ。運転手は、電話の会話から、微妙な二人の関係を感じ取った。

程なくして、車は目的地に着いた。女は料金を払うと、車から降りた。ドアを開けてアスファルトに踏み出す女の足元は、“赤いパンプス”だった。

25歳の一人暮らし（前書き）

25歳になって、初めて一人暮らしを始めた女性。期待通り、すぐに彼氏は出来たものの……。恋愛は難しい。

25歳の一人暮らし

大きな荷物を抱えた女性と、バラエティーショップの店員と思われる男性が、道路脇で手をあげ、タクシーを止めた。女性と店員は、それぞれカラーボックスと何かの荷物を持っている。店員は止まったタクシーの後部座席に荷物を入れると、丁寧に挨拶をして離れていった。残った女性も、丁寧に店員に礼を返していた。

動き始めたタクシーのドライバーに、女性が行き先を告げた。タクシー・ドライバーは、女性に話かけた。

「地方から、東京に出て来られたんですか？」

時期的に、一人暮らしを始める季節。しかし、返って来た答えは、「私、東京出身です。でも、最近、親を説得して一人暮らしを始めたいです」

「そうですか……。一人暮らし、どうですか。彼氏もすぐにできちゃったんじゃないですか？」

そう尋ねるタクシー・ドライバーに女性は、

「最近、彼氏と別れました」と、応えた。

「そうですか。恋愛って、難しいですね。原因は、男の浮気ですか？」

「うーん、逆です……」

「ええ、彼女が浮気ですか？」

「そうじゃなくて、あまりにも嫉妬深いので……。知り会ってすぐくらいに彼は、私の部屋に住むようになったんですけど。でも、その後が大変で」

深夜の街の中をタクシーは、右へ左へと走り続ける。

「学校からの帰宅がちょっと遅くなっただけで、何してたんだ！」とか、うるさくって」

「結構、心配性なんだ、彼氏」

「でも、それが、度が外れているくらいで。だから、別れました」
「そうか。一人暮らしの第一歩は、男の度を越えた嫉妬で、つまづいじゃったわけだ。私は結構、放任主義ですけどね」
「放任主義もいいけど、でも、心配もして欲しいし……」
“やはり、女心は難解だ……” と、タクシー・ドライバーは思った。

生きて行くって、大変ですよね。(前書き)

タクシーに乗った女が突然、運転手に「生きて行くって大変ですよね」と、こぼした。しかし、タクシーから降りるときには女は、笑顔になって降りていった。車内で、いったいに何があったのだろう。

生きて行くって、大変ですよ。

「なんか、生きていくって大変ですよ」

女は、タクシーに乗り込んでしばらくしたとき、突然、しみじみとした口調で言った。タクシードライバーは、突然の無茶振りに、

「そうですよねー」

と、相槌を打つのが精一杯だった。

「最近、両親が離婚したんです」

「そりゃあ、大変でしたね。できれば、離婚しない方がいいんですよけれども」

女は、続けた。

「母親が、姑との関係がうまく行かなくて。私、小さいころから何度も母親に連れられて、無理心中しそうになったことがあるんですけども、その度に、私が止めて」

「彼女が止めたんですか」

「お兄ちゃんがいるんだけど、全然、役に立たなくて。それに、父親も……」

「そうですか……」

「父親も、ぜんぜん役に立たなくせに、暴力がひどくて。最後は私も、“これじゃあ、離婚した方がいい！”って思いましたから」

「そうですか。やっぱり、男は優しいのに、かぎりますよね」

「よく、“生まれ変わっても、一緒になりたい”って言うじゃないですか。そんなのは嘘ですよ。 “永遠の愛”なんて、私、“ない！”と思います」

彼女のその一言に、それまで適当に相槌を打っていたタクシー・ドライバーが、断言するように言った。

「私は、“ある”と思います」

「そうですか？」

彼女は、タクシー・ドライバーの一言で、わけのわからない心の

緊張が解けていくのを感じた。

「ウチのカミさんは、昨年、ガンで亡くなったんですけど。私は、生まれ変わっても、やっぱりカミさんと、一緒になりたいと思っ
ますからね」

「運転手さんは、奥さんに惚れてたんですね」

「まあ、そうですね。でも、死なれちゃってはね。カミさんが生きていればこそ、綺麗なものは綺麗に思えるし、美味しい物は美味しい
も美味しいも、なんの意味も持たないですね」

「そうですね、素敵ですね。私、最近、彼氏と別れて。その彼って、
優しかったのは最初だけで。やっぱり、暴力がだんだんひどくなっ
て」

「男は、優しいのに限りますよ」

「運転手さんみたいな人が、いい！」

「ありがとうございます」

程なくして、目的地についた。彼女が降りるとき、タクシー・ド
ライバーに最高の笑顔を残していった。

100円玉の女(前書き)

タクシーに乗り込んできた女は、唐突に「全部、100円玉でしはらっていいですか？」とタクシー・ドライバーに聞いて来た。ドライバーは、一瞬ためらったが、ドアを開いた。

100円玉の女

23歳くらいの女が、タクシーを止めた。開いたドアから顔をのぞかせ、女が言った。

「すみません。全部、100円玉で支払っていいですか？」

「いくら分？」

「710円……ぶん、なんですけど」

最初の一言目よりも、女の声が一段低くなった。タクシードライバーは、一瞬ためらった。

「うーん、いいですよ」

「ありがとうございます」

ドライバーの声に、それまで強張らせていた女の表情が緩んだ。

女が乗り込むと、タクシーは走り出した。程なくして、女が話し始めた。

「私、男に振られちゃって」

よほど緊張していたのか、女は一気に話し始めた。その屈託のない女の豹変ぶりに、タクシー・ドライバーも一度は拒絶しかけた心を、許した。

「それは、大変ですね。人生、いろいろですからね」

「私、男に食わしてもらってたから、突然、お金が無くなって。最初は、コンビニのプリペイド・カードで買い物が出来ただけど、その後は、100円玉。それが、昨日で無くなって、今日は100円玉なんです」

「じゃあ、明日は、5円玉で生活ですか？」

「ううん。明日は、1円玉！」

「そりゃあ、大変だ！ 早いところ、仕事を見つけなくちゃ！」

「ううん。だから、早いところ、次の男を見つけるの！」

「次の……男ですか？」

「そこそこ！ 運転手さん、そこで止めて！」

車は、繁華街の中で止まった。女はカバンの中から71枚を数えて、10円玉を出した。ドライバーは、それをそのまま釣銭入れの中に入れた。

「ええっ！ 数えなくていいんですか？」

「いいよ。足りなかったら、サービスだ」

「運転手さん、ありがとうございます！」

礼を言つと女は、屈託の無い笑顔を残して、降りて行った。

タクシーは、軽快に走り出した。一陣の春の風が、タクシーの車内を通り過ぎて行った。

夢の続きを、一緒に（前書き）

タクシーは、新宿から二人の男女を乗せた。男は途中で車を降りた。すると女は、タクシー・ドライバーを相手に、話始めた。夢の続きは、一緒に……。。

夢の続きを、一緒に

靖国通り、新宿の大ガードから「中野方面に」といって、乗り込んできた男女二人の乗客。乗り込むなり二人はすぐに話し始め、仕事の人間関係の話に花が咲いていた。

「田所さんは人間的に問題があるんですよ、どう見ても」

女は40代半ばに思われる。こぎれいに行っている。

「山田さんは2、3年前に生理があがったといってた。どうやらそれがもとで、精神的に崩れやすくなったんじゃないかな。やはり、生理があがるといろいろと支障が出てくるんだらう。君は、いつごろ生理があがったの」

50代半ばと思われる男の質問に、それまで快活に話をしていた女は黙った。

「運転手さん、中野坂上で一人降りて、そのあと中野通りの南台へ」
女は話題を変えるように、行き先を告げてきた。程なくして、車は、中野坂上の交差点についた。男が降りて行った。車が動き出すと、女は話始めた。

「新宿で、歯医者事務をしているんですけどね」

「歯医者なら、この不景気は関係ないでしょ」

「そんなことないんです。多少の痛いのは、不景気でみなさん我慢するんでしょうね。患者は激減してます」

「そうですか」

「しかも、歯医者が馬鹿だから……」

「そうなんですか」

「どうせ、わたしは派遣だから、いいのよ」

「大変ですね。実は、私は小説家になりたくて。1年前まではライターの仕事をしていたんですが、不景気で食えなくなって。しかし、書くことは続けてるんです」

「頑張ってください。続けていけば、きっと夢が叶う時が来ますよ」

程なくして、車は南台に着いた。料金を払って車から降りるとき、私は女性の顔を見た。彼女も私の顔を確認するように、笑みを浮かべながら私の目を見た。ルームライトのオレンジ色の光に照らし出された彼女は40代半ばとはいえ、きれいな人だった。

擬似恋愛（前書き）

その言葉に、彼女の何かがつまづいた。

擬似恋愛

彼女は遠慮気味に、面影橋で手を上げた。タクシーが、彼女の前で停車した。パンツ・ルックの彼女は一見すると派手だが、どこことなく落ち着きも感じる。

「高田馬場まで、お願いします」

「かしこまりました。ルートは、新目白通りをまっすぐでよろしいでしょうか？」

「うーん……」

考え込む彼女にタクシー・ドライバーは、すぐに代案を提案した。

「明治通りから、早稲田通りのコースで？」

「それで、お願いします」

「かしこまりました」

タクシー・ドライバーは、そう答えると車をスタートさせた。タクシーが、新目白通りから明治通りを左折し、しばらくして馬場口の交差点の右折車線に入った。車の流れが途切れるまでのしばらくの間、空白の時間が、タクシーの車内を流れた。彼女が、携帯電話で話し始めた。

「うん、今、タクシー。渋谷に着くまで、後しばらく。うん、わかった。じゃあ、あとで」

何気なく、タクシードライバーは彼女に話しかけた。

「これから渋谷ですか？」

「ええ。友達が、展示会を開いているので、見に行つてあげるんです」

「絵とか写真とか、イラストとか？」

「洋服です」

「面白そうですね。学生時代のお友達ですか？」

彼女の年齢は、22、3歳くらい。

「バイト先の友達なんです」

「水商売？」

タクシー・ドライバーは、うつかり口にして、後悔した。

「そうじゃないですけど、みたいな」

「そうですね。以前はよく、キャバクラとかで、遊んでたんですけど」

「キャバクラですか……」

タクシーは、信号の矢印に従って早稲田通りを右折して、駅へと向かって走り始めた。

「キャバクラは、擬似恋愛なんですよ」

タクシー・ドライバーの言葉に彼女の何かが、鈍いが確実に反応を示した。

「擬似恋愛？」

「そう。恋愛ごっこ。たとえば、銀座の高級クラブで、“王様ゲーム”をしたこともあります」

「“王様ゲーム”？」

「そう。ゲームをして勝った人の命令を聞くんです。お客の男性が勝つと、“誰々ちゃんが、僕にキス！”とか。銀座だから、高かったらうと思います。私が料金を払ったんじゃないのでわかりませんが」

彼女は、そんな“王様ゲーム”のことよりも、タクシー・ドライバーの口にした「擬似恋愛」という言葉に、彼女の心の中の何かが、つまづいたようだった。

程なくして、タクシーは、高田の馬場の駅に着いた。

「ありがとうございます」

そう言って、タクシー・ドライバーに小さな笑顔を残して駅の改札へと歩いて行った彼女。その彼女の後姿に、そつと「恋せよ乙女……」と、心でつぶやいたタクシー・ドライバーだった。

愛とは奪うもの…… ヘソクリの隠し場所（前書き）

同棲中の若い彼氏のヘソクリを、黙って持ち出した彼女だが……。
古今東西、ヘソクリの隠し場所は、大して変わらない？

愛とは奪うもの…… ヘソクリの隠し場所

夕方近く、21歳ぐらいの彼女は、ルーズなワンピース姿でタクシーに向かつて手を上げた。タクシー・ドライバーは、着崩れた彼女の膝元の卑猥な雰囲気に、目が留まった。行き先をタクシー・ドライバーに告げるなり彼女は、携帯で女友人と話し始めた。

「そう、財布ごと全部パクられちゃって！ もう、カードとか全部止めたけど」

彼女はタクシーの後部座席で太ももあらわに、携帯の向こうの友人に向かつて彼女の現状を訴え続けている。

「今日は一銭もないから、彼氏のヘソクリの7万円を持って来ちゃって。そう、黙って。あとで、こっぴどく怒られるかもしれないけど」

“ 大変な、女だな ”

と、タクシー・ドライバーは思った。彼女の訴えは続く。

「彼のヘソクリ、どこにあったと思う？ 私の整理ダンスを整理してたら、私の下着の入っている、その奥に隠してあったの」
程なくして、タクシーは目的地に到着した。

料金を告げられた彼女は、彼氏の袋からお金を取り出した。

「すみません、大きいのしかないものですから」

そういって、タクシー・ドライバーに、一万円を差し出す。タクシー・ドライバーも事情をわかっている。

「事情は、聞くとはなしに聞こえてきましたら。それにしても、立派な財布ですね」

「給料」と書かれた彼氏のものと思われる茶封筒から、彼女はお金を取り出していた。

「やだー！ 立派な財布だなんて」

「それにしても、彼女の下着の入っているところに隠すなんてね」

「そうですよね」

そういつと彼女は元気にタクシーから降りて行った。

次に乗ってきた男性客が、たまたま脱税の話から、ヘソクリの隠し場所の話になった。タクシー・ドライバーは、先の女性客の話をした。

「若い女房の下着に紛れ込ませて、男のヘソクリを隠すなんていうのは、昔からあった手ですね。時代は変わっても、人間の考えることは変わらないんですね」

男性客の手荷物に、本屋の名前が入ったビニール袋があった。チラリと見えたその本のタイトルには「模範六法」と書かれていた。

“こっちは、隠し方も本格的なのかな……”

と、タクシー・ドライバーは、ふと思った。

怒りの“膝小僧”（前書き）

女の膝小僧が、怒りに震えていた。タクシー・ドライバーは、そのことを強く感じた。

怒りの“膝小僧”

繁華街のはずれ。一組の男女がタクシーを止めた。夜も酔い客で、街がざわめきはじめた時間。クール・ビズの男は、身のこなしも軽やかに、後部座席に乗り込んだ。続いた女はというと、少し様子がおかしい。いつもの男女の雰囲気とは、かなり違う。緊迫感がタクシー・ドライバーに伝わってきた。ドアを閉めるタイミングを計るため、タクシー・ドライバーは後部座席に乗り込む女の、膝頭を見た。緊迫感が漂っている。ワンピースの裾から顔を覗かせている“膝小僧”が、怒りに震えている。どうして膝小僧が、怒りに震えていることがわかったのか？説明できない。しかし、ワンピースの裾から顔を覗かせている“ナマ足”の膝小僧が、強い怒りに震えている。タクシー・ドライバーは、そう感じた。

「まるで、人魚みたいだね」

明るい声で男が、女に言った。

「マーメイドだ？」

と、語気を荒げて、女がいった。それまでこらえていた女の怒りが、堰を切ったかのように、男にぶつけられた。

「取って付けたような言い方、しないでよ！」

車内は、一瞬にして凍りついた。タクシー・ドライバーは固まっ てしまい、視線はフロントガラスにフィックス。男は話題を変えよ うと、つとめて明るい声で、続けた。

「今度の月曜日が、祝日だって知らなくてさ。お得意さんに言われ て、初めて気づいたよ」

「……」

「じゃあ、月曜日に、お伺いしますっていったら、お得意さんが、 『Yさん、いいんですけど。月曜日は会社が休みなんですよ』って 言われて、“ええ！”って」

「……」

重症だ。しかも、不倫のカップルのようだ。

「どうするのよ……」

男の煮え切らない様子に、女が業を煮やしているようだ。男は30台半ば。女は30歳前後。女にとっては、決断の“時”なのだろう。

あふれんばかりの緊迫感を、車内に満載したタクシーは、程なくして目的地に着いた。女が先に降りた。男が料金を払っている間、女はタクシー・ドライバーから顔が見えないように、街路樹の陰へと回り込んで、男を待っている。このあとは、タクシー・ドライバーのつたない経験からすれば、女の家で仲直り。それとも逆に、一気に破局へと向かうか。その境目は男の勇気しだい。タクシー・ドライバーはふと、自分の過去を思い出した。

タクシーは、赤いテールランプの海へと、再び戻って行った。ワンプースの“膝小僧”、がんばれ！ 悪いのは、いつの時代も“男”……。

恋ナビ、幸せにたどり着けますか……（前書き）

深夜、繁華街のはずれで手を上げた女。彼女の“恋ナビ”は、幸せのコースを指し示しているのだろうか……。女が降りて、静かになった車の中でタクシー・ドライバーは一人、思った。

恋ナビ、幸せにたどり着けますか……

深夜、新宿の繁華街のはずれで女が手を上げた。黒い鞆に膝丈のスカート、グレーの上下。ビジネス帰りのキャリア・ウーマン。タクシードライバーは車を寄せ、ドアを開けた。女は、疲れきった様子で車の後部座席に座った。

「飯田橋までお願いします」

「かしこまりました」

タクシー・ドライバーは、女にコースを確認すると車を出した。コースは新宿の靖国通りから市谷で外堀通りに入る。女は、そのコースを指定した。タクシードライバーは“神楽坂あたりで降りるのだろう”と思った。しかし、走り出して市谷を過ぎたあたりで、女が言った。

「運転手さん、飯田橋のNホテルに行きたいんですけど」

Nホテルに行くのなら、市谷で橋を渡って靖国通りから九段下の交差点を左折し、目白通りに入らなければならない。タクシー・ドライバーは答えた。

「申し訳ありません。Nホテルは飯田橋の交差点を右方向なのですが、この時間、交差点は右に曲がれないのですが。少し、まわり道になります。よろしいですか」

そういうと、女は応えた。

「もう少し早めに言えばよかったですね。お願いします」

「ただ、まわり道に多少、自信がないので、ナビを入れさせてもらってよろしいですか？」

「かまいません」

そういうとタクシー・ドライバーは、カーナビのタッチパネルを操作した。画面上に、交差点を迂回するコースが、スムーズに映し出された。女が言った。

「運転手さん、カーナビの操作が、お上手ですね」

「ありがとうございます」

一瞬、間が空いた。そして、女がポツリといった。

「ナビって、便利ですよ……」

「……そうですね。以前ですと、いちいち地図を広げていたわけですから」

女は後部座席で目を閉じ、しばらく静かにしていた。タクシーはNホテルの車寄せに滑り込んだ。女は料金を払い、車から降りようと腰をくねらせた。そして、小さく笑みを浮かべて言った。

「恋のカーナビ……も、あればいいのに……。ねっ、運転手さん」

「そう……ですね……」

タクシー・ドライバーはためらいながらも、そう答えた。タイト・スカートの後姿が静かに揺れながら、深夜のホテルの、薄暗いロビの奥へと消えて行った。

夜の静けさが、タクシーの中に戻ってきた。一人、タクシー・ドライバーは再び、車を繁華街へと走らせた。

嫁選びの“極意”（前書き）

老婆たちは、“結婚の極意”や“子育ての極意”、さらには“人生の極意”までも、さらりと語るのける。そんな極意の1つ……

嫁選びの“極意”

平日の午前中は、病院に通う老人たちがタクシーをよく利用する。そんな老人達は、特に老婆達は“結婚の極意”や“子育ての極意”、さらには“人生の極意”を、サラリと言つてのける事がある。

その日もタクシー・ドライバーは、幹線道路で手を上げた老婆の前に車を止めた。ドアを開けると、ゆっくりと、一つ一つの動作を確認しながら次の動作に移っているかのようなスピードで、老婆が乗り込んで来た。タクシー・ドライバーは、老婆が座席に納まるまで、じつと待った。そして、行き先を告げられてからは、今度は急ブレーキや急発進などで、老婆が後部座席でバランスを崩すことのないように、スピードに気を付けてタクシーを発進させた。しばらくすると、彼女が人生で得た“結婚の極意”や“子育ての極意”、さらには“人生の極意”を、ドライバーが聞いているとも、聞かれないとも関係なく、あれこれと話し始めた。

「私には、息子が3人いましたね。三人に“大学もいければ、仕事をしっかり覚えることも大事だ”と言っていたんですよ。おかげで、嫁にも恵まれましたね」

老婆は、楽しそうに話している。タクシー・ドライバーは、聞くとはなしに相槌を打っている。

「そうですね、そりゃあ、よかったですね」

と、ここまででは、よくある自慢話だった。タクシー・ドライバーは、あまた聞く“老婆たちの人生の極意”の中で“これは然り”という“結婚の極意”を、次の話しの中に確信した。

「三人の息子たちに、常日頃言っていたんですよ。“嫁を選ぶときは、一人娘の金持ちの家の娘を選べ!”とね。そしたら、うまく、三人とも、お金持ちの家の一人娘と結婚できましたね」

「そりゃあ、すごいですね」

「三番目の息子は、嫁さんの実家の敷地の中に、家を建ててもらい

ましたよ」

「願ったり、叶ったりですね」

「長男と次男は“男のコケンにかかわる”とかで、マンション暮らしをしてますがね。でも、やっぱり、嫁さんの親にお金を出してもらって、嫁の実家の近くに住んでますがね」

タクシー・ドライバーは、しばらくは老婆の“結婚の極意”を聞いていたが、そのうち、彼女のサクセス・ストーリーを聞いているとは思えなくなっていた。一見、3人の息子達が幸せな人生を歩んでいることの自慢話をしているかのように聞こえる。しかし、裏を返せば、自分から離れて、嫁達の実家の近くで暮らしている息子達への、老婆の寂しさを、暗に聞かされている様に、タクシードライバーには、思えて来た。

そして、話しは、老婆の身内の多くが「がん」で亡くなっている話にまで及んだ。そのとき、タクシー・ドライバーが、ぽつりと言った。

「私も妻を、一昨年、がんで亡くしましてね」

その一言で老婆が、グスリツと、涙を呑んだ。しばらく、車内に沈黙の時間が流れた。程なくして、何事も無かったかのように、タクシーは目的地に着いた。再び老婆は、1つ1つの動作を確認するかのように、ゆっくりと、しかも、後ろに止まったトラックのクラクションに惑わされることもなく、自分のペースでタクシーを降り、病院の玄関へと進んで行った。

小鳥の声……と、男の戦場（前書き）

朝の通勤時間、職場へ急ぐタクシーの後部座席で、携帯電話をかけるスーツ姿の男。ふと漏れてきた言葉は「小鳥の声で目覚めたんだと思ったよ」と、理解不能な言葉……。タクシー・ドライバーの推理が、始まる。

小鳥の声……と、男の戦場

午前8時過ぎ、通勤客がタクシーをよく利用する時間帯。スーツ姿の男が、幹線道路脇の大きなマンションの前で手を上げたのも、そんな時間だった。男はタクシーに乗り込み、都心のビジネス街へ急ぐように告げると、携帯電話で話し始めた。

「お早う。もう、起きていたの？ 昨日は、ご苦労様でした」

「……」

「君のおかげで、すごく助かったよ。本当に、ありがとう」

「……」

「目覚まし時計のアラーム音で起きたの？ そう。僕は君のことだから、“小鳥の声”で目覚めたのかと思ったよ」

「……」

二人の関係は、どういう関係？ ただの上司と女性部下。それとも、愛人関係にある上司と女性部下。「小鳥の声で目覚めたのかと……」の一言が、タクシー・ドライバーの洞察力の限界を超えてしまった。

もし、電話の相手が、ただの女性部下であったとしたら、“そこまで気を使わなければならない部下”ということだ、“かなり出来る女”だと、判断することができる。しかも現在、彼女には他社からのヘッド・ハンティングの噂があり、上司として彼女をつなぎとめておくのに必死、という状況にある二人、ということになる。それならそれで、男として、朝からたゆまぬ努力を重ねているのだなと、脱帽させられる思いになるのだが……。

そう思いながらも一方では、そういうビジネス上の関係とは一切関係なく、“危険な愛人関係にある女性部下”という状況も、“想定”される。それは、朝っぱらから“歯の浮くようなセリフ”を吐かなければならないほど、多くの時間とお金を注ぎ込んで“関係性を築き上げた“不倫関係”……。だとしたら、その一言からも、

かなりエキサイティングな関係にあるのだろうと、想定できる。

タクシー・ドライバーは、そんなからまった釣り糸のような邪念を振り払うかのように、アクセルを踏み込んだ。そして、混み始めた幹線道路の車列を縫うかのように、目指すビジネス街へと急いだ。

男が目指す場所は、ビジネスの戦場なのか、はたまた血で血を洗う情事の戦場となるのか。いずれにしろ、男にとって“逃げられない戦場”であることには、間違いない。

女は、何歳になってもドキドキしていたい……（前書き）

女は何歳になっても、ドキドキしていたいモノなのだろう。それは、男性だって同じだ。そんなときのドキドキを演出する小道具として、車は重要なアイテムだったようだが……。

女は、何歳になってもドキドキしていたい……

50がらみの女性が、タクシーに乗り込んだ。彼女を乗せたタクシーは、「六本木のミッド・タウンへ」と向かった。彼女からは、どこことなく普通の仕事ではない雰囲気を感じているタクシー・ドライバーだった。いわゆる『ギョウカイジン』という人種なのかも知れない、と彼は思った。その50がらみの女性を表現するとしたら、『ギョウカイジン』と表現する以外に彼女にぴったりと来そうな形容詞は、タクシー・ドライバーの頭には、浮かんで来ない。たぶん芸能関係者か紙、電波を含むマスコミ関係者か、はたまた、広告業界か。彼女が聞いた。

「あいかかわらず、車の数は多いですか？」

「そうですね。お盆ですから、都内の道路は平日に比べて、かなりすいていると思いますね」

「それはそうと、最近は、若い人が車に乗らなくなっただって言われてますよね」

「そうらしいですね」

「若い人たちは、車でデートしないで、電車でデートしているんですかね」

「車だと、何かと都合がいいのに」

「そうですね」

タクシーの中での会話に、その話しの意図しているところなど、本来、なんら意味を成さない。しかし、話しの内容と、彼女の年齢との間に、彼はギャップを感じながら、彼女の話に相槌を打っていた。

「車をバックさせるときに、男の人が助手席の肩に手を置いて、無意味に女性の方に顔を近づけて来たとき、やっぱり女性って、“ハッ”とするんですよ。“ちょっと顔が近づきすぎ！”とか。あんなドキドキとか、いいのにねえ」

「そうなんですか。やっぱり」

「そうなのよ。でも、車に乗らないんじゃない……」

車は程なくして、六本木のミッドタウンの前に着いた。

車から降りたときに「ありがとう」と彼の方へ視線を投げかけた彼女の顔は、50歳台というよりも60歳台とっていいくらいだった。女性は、いくつになっても、恋愛のドキドキを忘れないのだから、ふと、タクシー・ドライバーは思ったのだった。

男女の“感情のもつれ”は、ボーダレス！（前書き）

国籍が問題なのではない。二人の間で、しっかりと信頼関係を築けるかどうか、重要な問題なのだろう。

男女の“感情のもつれ”は、ボーダレス！

彼女は、大きなマンションのある交差点の角でベビーカーを脇に止め、手を上げた。タクシー・ドライバーは、車を女性の前で止めた。ベビーカーをトランクに積み込んだ。運転席に戻り、彼女と赤ん坊が後部座席に収まったのを確認して、ドアを閉めた。

「湾岸のヨット・ハーバーまで」

そういわれ、彼は車をスタートさせた。

「いつもは、電車で近くまで行ってタクシーを利用するんですけど」
そういいながら、彼女は赤ん坊の面倒を見始めた。赤ん坊は、後部座席のウインドウのスイッチで遊びはじめた。ウインドウが一人で何度か開いた。

「すみません。窓、開かないようにしてもらえますか？」

「そうですね。危ないですから、今、ロックしますね」

「ありがとうございます」

「ロックがかかっていると思いますが、ちょっと確認してもらえますか」

「はい。大丈夫です」

車が動き始めて5分もたっただろうか。彼女は、インド系イギリス人と結婚しているという話になった。

「彼は、インドで生まれて、小さいころにイギリスに渡って。見た目はインド人ですけどねども中身は、イギリス人なんです。日本で英語を教えています」

彼女は、夫がインド系イギリス人で、日本の大学で英語を教え、ときには、日本政府の高官を対象にした英語の講習会を持つたりしていると話した。また、夫の母国であるインドのカーブ制度やイギリス人の人種意識、さらには、日本の女の子に対する白人の印象にまでと、わずかな時間の中で、話しは多岐にわたった。

彼女自身も結婚前は、英語を教えていた。それがキツカケで、ご

主人と知り合ったようだ。

「白人男性は、日本人の女性に対して、どう思っていると思いますか？」

「どうなんでしょうか」

「彼らは、“日本でなら、3ヶ月で結婚できる！”って、豪語しているんですよ。自分の国では、一生結婚できそうにない白人男性でもですよ」

「それは、日本人女性の意識をなんとかしないとまずいですよね」

「聞きながら、自分もその一人だと思つと、腹が立って来て。でも、一時期、日本人女性が、すごく人気が出たころがあつたのも事実ですけど」

「今は、それほどでもないんですか」

「残念ながら、そうでもないです」

そのうち話しは、ご主人の内面的なコンプレックスにまで触れはじめた。

「たとえば、ベトナム系イギリス人とか、韓国系イギリス人とか、そういう人たちつて、自分のアイデンティティーの核として、自分の母国のことをよく自慢したり、大切に思っていたりします。でも、ウチの主人の場合、どうも違うみたいなんです。カースト制度もあるでしょうけれども、また、小さいころから、きつといろいろと心に傷を負って来たんだと思います。でも、あまり、そういうことを話してはくれませんが」

「そうですね。日本人は、そういうことに結構、無頓着ですけどもね。一步日本を出ると、世界は違うんでしょうね」

「あつ、ここで！」

車は、湾岸のヨット・ハーバーにたどり着いた。ゲートで迎えてくれたのは、彼女の母親らしき女性。迎えてくれた彼女の表情が、タクシー・ドライバーの表情を見て、一抹の不安を感じている様子だった。タクシー・ドライバーの女性客に対する態度が必要以上に親身になっているように感じたからだろう。もしかすると、そう思

えるのは夫婦仲に、母親としての不安を感じているからなのかもしれない。そのとき彼には、そこまで洞察する暇はなかったが、あとで思い返す度に、そう思えてきた。

幸せそうな国際結婚に思えても、内実は、どこの夫婦も問題をかかえているもの。国際結婚が難しいのではなく、男女の感情のもつれが、難しい。それは、国籍を問わないようだ。

ウォーターフロントの高層マンションに消えた二人（前書き）

深夜の繁華街で乗せた若いカップル。その二人が、タクシーに残していったものとは……。

ウォーターフロントの高層マンションに消えた二人

深夜の新宿の繁華街。若いカップルがタクシーのドアを叩いた。予期せぬ場所でドアを叩かれたタクシー・ドライバーは、一瞬戸惑った。しかし、すぐに客だとわかると、ドアを静かに開けた。

「ちょっと、遠いんですけど……」

二人連れの若い男が、遠慮気味に言った。

「どうぞ」

タクシー・ドライバーが応えた。若い男が続けた。

「ウォーターフロントまで」

「かしこまりました」

ドアを閉めたタクシーは、深夜の新宿の賑わいの中を切り裂くようにして、喧騒の街角を抜け出した。タクシーは程なくして、静かなビル街を走っていた。同じ東京でも、時間と場所が違つと、まったく雰囲気違ってしまふ。先ほどまでの町の賑わいが嘘のように静まり返る。タクシーは、静まり返つた闇の中を進んで行った。

「ルミちゃんは、帰つたの？」

男が小声で、女に聞いた。

「まだ、お店に残つてた」

「じゃあ、ヒロ君たちと一緒に。彼女、彼らに任せておいていいの？」

「大丈夫！」

女は、意味ありげに言葉の語尾を上げた。男も、それに対して苦笑して応えた。

「終電は、もうないけど、いいの？」

「大丈夫……」

女の言葉のトーンが、心なしか下がった。

「どうするの？」

「タクシーで帰る……」

女は男の質問に、小声で答えた。

「……」

男の言葉が、途絶えた。

ウォーターフロントの高層ビル群の一角で、タクシーは止まった。

「料金は、4千百三十円です」

タクシー・ドライバーの声に、

「三十円ある！」

と、女が反応して応えた。

男が4千円を出して、残りの百円を探していた。男が女に言った。

「百円、あるかな？」

女が言った。

「ない……」

ほんのわずかな沈黙の時間の後、男が千円札1枚を追加しようとした。そのとき、タクシー・ドライバーが言った。

「百円……、サービスです」

「すみません」

若い二人が、声をそろえて言った。タクシーから降りた二人は、深夜の薄暗い高層マンションのエントランスへと、吸い込まれていった。

タクシー・ドライバーは、遠い記憶の彼方へと去ってしまった、あのときの二人の時間を思い出していた。そして、それだけで少し、幸せな気持ちになれたのだった。

深夜のバツイチ子連れギャル（前書き）

深夜の国道沿いで乗せた、若い母親と幼子の親子。若いタクシー・
ドライバーは二人を降ろした後、いつもになく、わずかに心が騒い
でいた。

深夜のバツイチ子連れギャル

深夜の国道沿いで、一組の親子連れが手を上げた。人影も全くない場所である。タクシーはウインカーを左に出し、速度を落とすしながら近づいて行った。子供は男の子で3歳くらい。母親は20歳前後。年齢から母親の服装は“ママ・ギャル”系だが、“わずか”に地味系である。

タクシーに乗る前から、子供が“ダダ”をこねていた様子だ。若い母親は、深夜ということも手伝って、声に疲れを感じる。それが控えめな態度となつて、どことなく心をひかれる。

母親が子供をなだめながら、疲れた声で一言いった。

「そんなに、パパのところがいいの？」

「うん」

子供は、無邪気に応えた。

彼女は、次の言葉に詰まった。そんな母親を尻目に子供は、さんざん“ダダ”をこねた後、疲れたのだろう、母親の膝で寝入ってしまった。タクシー・ドライバーが、ポツリと一言聞いた。

「今日は、ご主人のご実家だったんですか？」

「ええ、そうなんですけど……」

若い母親はわずかな沈黙の後、身の上を、話し始めた。

「私は、小学校6年のときに母親を病気で亡くし、それから2年後の中学2年のとき、父親も病気で亡くして。それ以後は、親戚に預けられて。高校卒業後、就職して一人暮らしを始めたんですけど」

「それは、大変でしたでしょう」

タクシー・ドライバーは、次の言葉を捜しあぐねた。

「私は、早く家族が欲しくて、二十歳前に結婚して子供を産んだんです。これで自分の家族が持てたと喜んだんですけど。でも……。半年前に離婚して、この子は私が育てることになって」

「シングル・マザーですか」

「子供連れで、仕事を見つげるのも大変ですし……」

「でも、最近では、シングル・マザー支援のための色々な制度がありますし……」

独り身のタクシー・ドライバーの言葉が、むなしく闇の中に吸い込まれていく。タクシーは、深夜の都内を走りぬけ、30分も走っただろうか。男女の気持ち動くのに、時間の長短は関係ない。恋が生まれる瞬間の“歯がゆい空気”が、狭いタクシーの車内にあふれ出したころ、静まり返った商店街の小さなビルの前で、タクシーは止まった。

「さあ、おウチに着いたからね。もう少しよ」

若い彼女が、眠くてどうしようもない小さな子供の手を引いて、アパートの階段をゆっくりと上がって行く。ドアを閉めたあとタクシーは、いつもよりわずかに長い時間、その場所に止まっていた。そして、何かを振り切るように、走りだしたのだった。

どうすれば、優しくなれるんでしょう？（前書き）

スーツ姿の美しい彼女。その彼女は、彼だったが、その声は、聞く者を包み込んでくれる優しさに溢れていた。沢山の恋愛の修羅場が、彼を、彼女を優しくしたのだろうか。

どうすれば、優しくなれるんでしょう？

タクシー・ドライバーが、そのお客を乗せたのは夜の8時を少し回ったころだった。ベージュ色のスーツ姿が美しい、すらりとした体型の女性が、繁華街のはずれで手を上げた。夜の遠目で美しいと感じられた女性は、タクシーに乗り込んでくるとき、特にそのタイトスカートの膝頭が、独特のオーラを放っていた。行き先を告げたあと、彼女は一言断ってから、携帯電話で話し始めた。

「奈菜ちゃん、どうもありがとうございます」

と、話し始めた彼女は彼女ではなく、彼だった。大柄ではあるが、均整の取れた美しいスーツ姿は、確かに絞り上げた男性の体型を女装で包み込むと可能であろうと思われる、美しさである。

「すつごく助かったわ。本当にありがとうございます」

しかし、タクシードライバーを虜にしたのは、彼女の絞り上げた体型から醸し出される女装の美しさではなく、「ありがとうございます」と発した、その声の響きだった。当然、当初、“彼女だ”と思った段階で想像した声よりも低いトーンであり、しかも、その声がおカマのそれと分つていても、その声を聞く者をして、心の底から包み込んでくれる優しさが、その声には溢れていた。タクシー・ドライバーは、その彼の声に聞き惚れてしまった。そして、

「その角を右へ」

といった彼の声を、聞き逃しそうになった。タクシー・ドライバーは、角を曲がり損ねそうになったタクシー・ドライバーは、

「すみません。お客様の声が、すごく優しくて芯の強い人の声に感じられたもので、つい、聞き惚れてしまいました」

とってしまった。しかし、彼は、不快に感じるどころか、

「ありがとう。最近、どんどん声が低くなって来て、どうしようかしら」

と、優しく応えた。

「いえいえ、聞く者を包み込むよう声で、すごく優しくて、芯の強そうな人に感じられました」

「優しくて芯が強い、ですか。とんでもない。それどころか私は、沢山だまされて来ましたから」

タクシー・ドライバーの脳裏に、彼が越えて来たであろうと思われる“沢山の恋愛の修羅場”の映像が、浮かんでは消えた。

「どうすれば、優しくなれるんでしょう？ どうしたら、芯の強い人になれるんでしょうね？」

その彼の言葉にタクシー・ドライバーは、“沢山、苦勞をして来た人……”と、ありきたりな答えを口にしようになったが、思わず言葉を飲み込んだ。

「それは、難しいですね」

そして、彼も、

「そうねえ。難しいわね……」

と語り、車窓から見える街のネオンの明かりに、視線を向けた。

“彼には、これまでどんな人生があったのだろうか”と、タクシ

ー・ドライバーは思いを巡らそうとしたが、像を結ばない。

程なくして、車は目的地のお店の前に着いた。料金を支払って車から降りて行く彼の顔をまじまじと見たが、タクシー・ドライバーの彼への印象は、変わらなかった。

「どうすれば、人は優しくなれるのでしょうか。どうしたら、芯の強い人になれるのでしょうか」

そう言った彼の言葉が、タクシー・ドライバーの脳裏にこびりついて、しばらく離れなかった。

宮益坂の途中で…… 前編（前書き）

宮益坂の途中でタクシーに乗り込んだ、男性一人と女性二人のグループ。タクシーに乗る前からモメていたのか、移動中の車の中で一人の女が騒ぎ出す。深夜の大都市を走るタクシーの中で、男のズルサと女の悲しさが交錯する。

渋谷の宮益坂の途中で、男が手を上げてタクシーを止めた。タクシーに近づいた男は、

「今、人を呼んでくれますので、ちょっと待っていて下さい」

というと、道路の反対側の数人の男女のグループに駆け寄って行った。程なくして男は、女を二人連れて戻って来た。しかし、一人の女は、タクシーに乗ることを拒んでる。

「由理ちゃんは、どうしたの。一人じゃ帰れないでしょ！」

激しい口調で素晴らしいながら、乗りかけたタクシーを降りて、車が行き来する道路の反対側へ行こうとする。男が、それを無理やり抱とめて、タクシーに戻そうとする。

女は、かなり酔っているように見える。タクシーの中に押し込められた後も女は、

「由理ちゃんは、ちゃんとタクシーに乗ったの？」

と、相変わらず同じ内容の話しを繰り返している。見かねた、もう一人の女が、

「由理ちゃんは、ちゃんとタクシーに乗ったから、大丈夫！」

女を抱きかかえるようにしてタクシーに乗せた男も、

「大丈夫だよ。由理はちゃんと帰るから！」

と、2度3度二人に言われて、泥酔気味の女は静かになった。

「美保は、優しいね」

そう呼びかけられた泥酔気味の女は、

「彩^{あや}さん、私は優しくくない！」

と、美保と呼ばれた女は、さらに不機嫌そうに叫んだ。彩と呼ばれた女が続けた。

「美保さんは、モデルでしょ」

そういわれた美保は、当たり前のように、

「まあね……」

今度は、前よりも幾分冷静に答えた。

「彼氏、いるの？」

彩にそう聞かれて、美保は答えた。

「3人」

きっぱりとした口調で、美保は答えた。

「3人もいるの？」

彩が驚いた。男は、黙っている。彩が続けた。

「私は、バツイチだけど。美保は、いいお嫁さんになりそうだね」

「そう。私は、一人と決まったら、その男に徹底的に尽くしちゃうタイプ！ ハッハッ」

美保は、自嘲気味に笑いながら、強い口調でそう答えた。男は、黙っている。

信号でタクシーが止まったとき、美保は、再び叫びだした。

「私、降りる！ 出して、運転手さん！」

タクシー・ドライバーが困惑気味に言った。

「ここは、無理ですよ。このちょっと先で……」

そう、美保に答えるタクシー・ドライバーに、

「いいです。このまま、まっすぐ行ってください！」

男が、強い口調でタクシー・ドライバーを制した。（この回、続く）

宮益坂の途中で…… 後編（前書き）

東南アジアのどこかの街角に似た、この街。三人の男女が飲み込まれていく先に、幸せが見えているのだろうか。深夜の大都会を走るタクシーの中で、男のズルサと女の悲しさが交錯する。

しばらくして、車内は静けさを取り戻した。信号で車が止まったとき、そんな静けさを美保の一言が壊した。

「吐きそう！」

「運転手さん、路肩に車を止めて！」

彩が叫んだ。タクシードライバーは、車を路肩に止めた。明治通りは、深夜だというのに車の往来が激しい。路肩に止まったタクシーから美保は、道路脇の茂みに転がるように近づくと、一気に胃の中の物を吐き出した。しばらく茂みに向かってしゃがんでいた美保が、幾分スッキリした顔でタクシーに戻って来た。背中をさすって、彩が、それに続く。

「いいですか、ドア、閉めますよ」

タクシー・ドライバーが誰にとはなく言った。

「はい」

美保が低い声で答えた。そして、続けた。

「新宿の二丁目のあとは、北千住に向かってください」

「馬鹿言ってるじゃねえよ！ 運転手さん、兎に角、2丁目！」

男が激しい口調で言った。

「北千住って？」

彩が、美保に聞いた。

「美保は、三軒茶屋に住んでるんじゃないの？」

「うん。本当は私、北千住に住んでるの」

「じゃあ、三軒茶屋は？」

「色々あって、ねえ！ 真治」

「真治」と声をかけられた男は、今までの血気盛んだった様子から一変して、再び静かになった。

「なーんだ、そういうことだったの……」

彩は、これまでのことを全て理解したかのように、うなづいて見

せた。

「要するに、真治さんの我がままに美保が怒ったわけね。その我がままの相手としてトバッチリを食ったのが由理ちゃん、というわけなーんだ。心配して損しちゃったみたい、私……」

車は明治通りから甲州街道を大きく右折し、トンネルの側道に入った。薄暗くなった通りの、一つ目の信号を通り抜け、暗い路地を左にハンドルを切る。すると、その視界の先には、どこか東南アジアの通りに迷い込んだ様な景色が現れる。若い男同士のカップル。店の軒先からはみ出たテーブルで小瓶のビールをあおる黒人の男、白人の男。二人の間でビールをあおる日本人の女。

タクシーは、時折り車を無視して人が行きかうメインストリートを、奥へとゆっくり進んで行った。

「運転手さん！ この辺で止めてください」

メイン・ストリートから靖国通りへと抜ける少し前で、男が言った。男がお金を払って、三人はタクシーから降りた。タクシー・ドライバーは発進させると、ゆっくりと車を走らせた。すると、タクシーを

降りたばかりの美保が、右側の歩道を一人で歩いている。薄暗い車内で気付かなかったが、改めてみる美保は、美人だった。タクシーは彼女の側を、ゆっくりと通り過ぎた。彼女が“北千住”へ向かってくれることを期待して。

歩道を揺れながら歩く美保を、あとから真治が追いかけてきた。

そして、真治が美保を抱きかかえるようにして連れて行くことしたが、美保は強く拒んだ。しかし、酔いが手伝ってか、静かに真治に抱きすくめられ、来た道を2人で戻って行った。

タクシーは信号を左折して、激しく車が行きかう深夜の靖国通りへと飲まれていった。（この回、終わり）

二人の女性 前編（前書き）

たまたま同じ夜に、別々に同じタクシーに乗り合わせた二人の女性。わずかな乗車時間の間に垣間見えた、二人の女性の生き様。同じ時代を生きる女二人の愛と仕事と……。

二人の女性 前編

夜もにぎわい始めた六本木の交差点で、その女は、手を上げた男と連れ添っていた。男はロン毛。年のころは30台半ばで小奇麗だが、ラフな洋服だ。女はワンピースを上品に着こなした20台半。身長は165センチくらい。

タクシーは二人とも乗車するものだと思って、近づいて止まった。しかし、男は女をタクシーに乗せると路上に残って、女に向かって丁寧にお辞儀をして、手を振った。

女が一人、車に取り残された。タクシーが発車してしばらくすると、女が話し始めた。

「運転手さん、この時間、混みますか？」

「そうですね。帰宅の時間ですから、混んでるでしょうね」

「そうですね。私は深夜か早朝にしか乗らないので、分らないんですけど」

「お客様は東京生まれで、東京で育った方ですか？」

「いいえ、千葉です」

「そうですね。私は、能登半島ですけども」

「あの、“出っ張った”ところですよね」

「そうですね。あの、“出っ張った”ところです。大学に入るので、東京に出てきたんですけども」

「田舎に帰りたいですか？」

女の声のトーンが幾分低くなったように、タクシー・ドライバーには思えた。

「そうですね。帰りたかったですし、今も思ってますね。大学を卒業するとき東京に彼女がいたものですから、東京で就職になつたんですが。大学4年のときに、東京に彼女がいなければ、田舎で就職したかもしれないですね」

「そうですね」

「でもね、結婚したのは、大学時代の彼女とは、別の女性になりましたがね」

「そんなものですよね……」

女は、そう答えた。その女の口調は、“感慨深げ”な口調のように、タクシー・ドライバーには感じられた。

彼女にとって“恋愛と結婚”は、やはり“別物”なのだろう、とタクシー・ドライバーは思った。

その後も女は、タクシー・ドライバーの身の上話を、楽しそうに聞いていた。

二人の女性 後編（前書き）

深夜の青梅街道で乗ってきた女性。「人生って、難しいですよね」
の言葉を残して……

二人の女性 後編

深夜、午前1時過ぎ。空車のタクシーは、青梅街道を新宿に向けて走っていた。中野通りに近い道路沿いで、一人の女性が手を上げていた。深夜のせいもあって周囲の闇に溶け込んで見逃しそうだったが、タクシー・ドライバーは彼女を見つけ、車を寄せた。行き先は上馬。246と環七の交差点だ。中野通りに近いことから、中野通りを下北沢に抜ける道を、タクシー・ドライバーは彼女にすすめた。彼女は、

「それで、お願いします」

と言うと、タクシードライバーに聞いた。

「この時間、眠くないですか？」

タクシー・ドライバーは、不意に聞かれた質問に一瞬、答えることをためらった。

「まあ、1番眠かったのは12時前後ですかね。今は、ピークを過ぎましたね」

「そうですね。私は介護の仕事をしていた、一時期、深夜の訪問介護を担当していたことがあるんです。その時は、この時間帯は眠くて眠くて。家に帰ってからも、寝付けないことがよくあって。結局体を壊してしまいました」

「そうですね。女性には、きついでしょうね。私は家に帰るのが、午前7時くらいで」

「そんな時間になるんですか！ その日は1日、お休みですか？」

「約24時間、休み。で、翌日の午前7時半ころから、再びタクシーに乗っています。仕事の明けの日は、明るいうちは3時間以上は寝ないようになっています。夜は午後9時ころには、布団に入って。翌日の午前5時半ころには起きて、仕事に向かう生活ですね」

「明るいうちは、3時間ほどしか寝ないんですか？」

「そうすることで、体のリズムを維持できているんだと思いますね」

タクシーは中野通りを南下し、井の頭通りと交差する大山の交差点を過ぎ、小田急線の東北沢の駅の手前を右に折れ、細い通りを下北沢へと向かった。

「私はまだ、タクシーの運転手になって2年ですけど、その前はフリー・ライターをしていて、全国を飛び回っていたんですよ。そのころの仕事は大手の出版社の仕事がメインで、楽しくて楽しくて」

「そうなんですか。でも、出版界も難しい時期なんですか」

「そうだね。それに、自分で会社を興してみただけど、それもうまく行かず」

「人生つて、難しいですよね」

タクシーは、下北沢の駅の踏み切りを渡ると鈴なり横丁の前を通った。道の両脇には若い人たちの姿が、深夜の割には多くみられる。車は茶沢通りを三軒茶屋へと向かう。しばらく行くと人通りはなくなり、再び暗い通りが続く。

「やあ、このまま仕事を止めにして、二人で飲みにも行きたい気分ですね」

「そうですねえ。もっと、お話しを聞いていたい気分ですけど」
程なくして、車は目的地に着いた。

246沿いで降りた彼女は、そのまま深夜の路地へと消えて行った。

ガールズ・トーク “愛”は奪うもの……（前書き）

「彼に、電話をしたりメールを送ったりしたことはない」という女。
「ええ？ それでいいの！」と反論する女友達。「うーん。連絡を
取ると、彼の彼女に見つかっちゃったら……」愛は、奪うもの……。

ガールズ・トーク “愛”は奪うもの……

「その日、彼とは、つまり“そういう関係”になっちゃったの。彼には彼女がいるし。だから当然、遊びだろうと思ったし」

タクシーの後部座席で、一人の女性がいった。それに対して、もう一人の女性は、驚いたように言葉を返した。

「ええ？ 知ってて、そうだったの！」

「そう、知ってた。だから、彼にとっては“遊び”だろうと思ったし、私も、その時は、それで割り切ったの」

二人は22か、23歳くらい。クリスマスも近づいて、新宿の街も心なしか、浮き足立っている。そんな深夜のタクシーの後部座席での会話である。服装は、ごく普通の二人。仕事先のキャバクラでフロアマネージャーの男性をめぐっての、恋の鞘当てゲームのようだ。

「彼とは、それっきりなの？」

「ううん。それから、2、3日して、彼から電話があって」

「ええっ？ アヤは、会ったの？」

アヤと呼ばれた女性は、心の動揺を見せることもなく、静かに続けた。

「彼、仕事を終えた深夜の12時半くらいに、彼のアパートのある駅に着くの。駅から自分のアパートに帰る途中、私に電話をかけてくるの。実は、私のアパートと同じ駅なの。それで、彼が来るときは電話をかけて来てから10分ほどで、私のアパートに……」

「そうだったの。アパートが近いんだ。じゃあ、アヤのアパートに彼が来て……」

「そう。2回目の、そういう関係に。でも、これで、終わりにしなくちゃと思っただけ」

「そうよね。それ以上になったら、どんどん泥沼にはまっちゃうだけよね」

男との関係を持った女は、そこできつぱりと決別できれば、不倫関係でトラブルになんかならない。

「それ以来、彼が深夜の12時過ぎに電話をかけてくるのを待つてしまっようになって……」

「うーん……」

「電話をかけて来たのに、来ない日もあつたり。そういう日は、彼女の待つている自分のアパートに帰っちゃうんだろっけど……」

「じゃあ、本気になっていっっちゃつたんだ。彼とは、どれくらいのペースで会つてたの？」

「2、3日置き、くらい」

「それつて、結構、頻繁じゃない！」

「うーん」

タクシーしか走つていない深夜の東京の街。流れていくヘッドライトに照らし出される二人の顔が、車内のルームミラーにストップモーションのように現れては、消える。

「関係は、今も続いているの？」

「ううん。2ヶ月前に彼から電話があつたんだけど、シカトしたの。それが、2回ぐらいあつて。それ以来、彼からはまったく連絡がなくなつて」

「本当？ それで、アヤはいいの？」

「うーん？」

「アヤからは電話したり、メールしたりしないの？」

「したこと、ない」

「ええっ！ どうして？」

「だつて、彼には彼女がいるし。もし、見つかったら……」

「そうねえ……」

タクシーは、大通りから細い道へと入つて行つた。

「でも、アヤはそれでいいの？」

「もう、2ヶ月なんだから」

「そう。じゃあ、今は好きな人とかは？」

「いない！」

程なくしてタクシーを降りた二人。薄暗い街路灯の下を、路地の奥へと歩いて行った。

「ふーん……」

「そうなんだけど……」

二人の会話は、まだ続いている。二人の声は夜の闇の中の、路地の奥へと消えて行った。

ガールズ・トーク2 ファイル名「猿」(前書き)

クリスマスの“イブ・イブの夜”。職場は同じでも、三人三様の人生を歩んでいる女性が、同じタクシーに乗り合わせた。

ガールズ・トーク2 ファイル名「猿」

クリスマススの、“イブ・イブ”の夜、繁華街で3人の女性がタクシーに乗った。

「私って、身持ちの硬い人じゃない」

入り口のドア側に座った、3人の中で一番酔いが廻っている女性が言った。

「そうなの？」

中央に座った遊び人風の女性が“あなたのプライベートは、よくわからないけど”という雰囲気です、答えた。

「そうそう。だからそれを、開けてみて」

もう一人の、タクシー・ドライバーの後ろに座った女性は、流れて行く車外のビルの明かりに視線を泳がせながら、携帯電話に向かって、なにやら指示を出している。込み入った話のようだ。

「その私だよ、身持ちの硬い私が……。キスしちゃったの！」

「ふーん。そう。誰と？」

“よくある話じゃない。珍しくもなんともない”といった口ぶりで、遊び人風の女性が答えた。

「だから、その窓の中にファイルがあるでしょ。Nコンサルっていう……！」

携帯電話に指示出しをしている女性の口調が、だんだんと激しくなってきた。一方、そんなこともどこ吹く風の“身持ちの硬い”女性が続ける。

「彼がね、酔った勢いで、私にキスを迫ってきたの！」

「よかつたじゃない」

否定的な遊び人風の女性。

「だから、“Nコンサル”のファイルを、とにかく開けてみて！」

“猿”じゃないって、Nコンサル。どこに“猿”っていうファイルがあるのよ。本当に！」

「彼が、オデコにキスを迫ってきたから、私、それを受けちゃったの！」

「彼のキスを受けたの、オデコで」

「そうじゃないって。唇で受けたの」

「そりゃそうでしょ。彼の唇が迫ってきたわけよね」

「そうじゃなくって。私のオデコにキスをしようとした彼の唇を、私の唇で受けたの」

「間違えて、唇で受けちゃったの」

「うっん。そうじゃなくて、私の方から」

「はあ？」

「“猿のファイル”なんてあるわけじゃない。だからさっきから言ってるでしょ！ “猿”はないって！」

「はあーん？ あなたの方から、オデコで受けたわけでしょ？」

「違うの。この身持ちの硬い私が、私の唇で、私のオデコに迫ってきた彼のキスを、積極的に、私の唇で受けに行ったの！」

「ふーん。よかったじゃない。間違えちゃったわけね……」

「この身持ちの硬い私が、何たる不覚！ この身持ちの硬い私がよ！」

「だから、“Nコンサル”で、“社内の猿のファイル”じゃないって、いつてるでしょ。もう！」

そんな3人に向かってタクシードライバーが、冷やかな口調で言った。

「お客様。渋谷ですけれども、交差点の先にしますか、手前にしますか？」

遊び人風の女性が言った。

「交差点の手前でいいです」

もう、一人の“身持ちの硬い女性”が酔った勢いで言った。

「彼の家！」

もう一人の女性は、携帯電話に向かって、言った。

「猿の家！」

翼の折れたキャビン・アテンダント（前書き）

希望退職して、かの有名航空会社を退職した女性。彼女の気配りに、ちよっと気持ちが揺れて……。

翼の折れたキャビン・アテンダント

冬の季節、日の落ちるのが早い。とつぷりと日の暮れた山手通り。中目黒を過ぎたあたりのマンションの前で、一人の女性が手を上げ、タクシーを止めた。

「渋谷の駅まで」

と、その女性は言った。タクシーをスタートさせると程なくして彼女は、携帯電話を使い始めた。相手は誰だかわからないが、仕事を探しているというようなことを話している。

「月に一度出向いて、報告をすればいいんですよ」

ひとしきり話をして、最後に、

「パソコンじゃなくて、携帯の方にメールをください」

そういつて彼女は、携帯を切った。そして、タクシー・ドライバーに向かつて、彼が聞いているとれないとにかかわらず話始めた。

「私、つい最近、航空会社を退職したんです」

「あの有名なですか？　それで、仕事を探している話をしてたんですね」

「ええ。指名で退職勧告される前に、私の方から希望退職したんです」

「そうですね。大変ですよ」

「それで、職業安定所に行ったんですけど、“パソコンは使いえますか？”と聞かれて“使えません”と答えたら、担当の方は困った顔をしてらして……」

「そうですね。最近、パソコンは鉛筆代わりですからね。パソコンくらい使えないと仕事にならないですからね」

「そうですね。でも、しばらくは雇用保険で、ぎりぎりまでのんびりしようと思って」

「いいですねえ」

空の上では花形の『キャビン・アテンダント』も、地上にあって

は翼をもがれた、ただの接客のプロでしかないわけだ。それはそれなりに需要はあるだろうが、問題は年齢との戦いになりそうだ。

タクシー・ドライバーがいった。

「でも、私なんかパソコンは結構使えますけれども、年齢的なもので、なかなかいい仕事には就けませんからね」

「それでしたら、タクシーの運転手の方って、いろんな方のお話が聞けるから、結構面白そうな文章が書けるんじゃないですか？」

「書いてます。単行本も出しました。でも、なかなか難しいですよ
ね」

「そうなんですか」

「小説も書いてます」

「へえ、どんなのを書いてらっしゃるんですか？」

「タクシーの中では、いろんな話を拾いますけれども、小説にするのは恋愛話だけです」

「面白そうですね。それは、読めるんですか？」

「ちょうどいいですよ。お客さんはパソコンは使えないけど、携帯メールが使えるということですから、『携帯小説』に発表しているんで、ぜひ、暇だったら読んでみてください」

「お友達にも、“私が、応援してるの”とって紹介します」

「そういつていただけると、光栄です」

タクシードライバーは、サイトの名称とペンネームを伝えた。

“翼をもがれて地上に落ちたエンジェル。私の腕の中に落ちてこな
いかな……。パソコンなんて、使えなくても全然、平気だから”

空になった後部座席をルームミラーで見ながら、そう思ってみる
タクシー・ドライバーだった。

博多弁の女（前書き）

福岡出身のカップル。東京に出て来てからも、なかなか博多弁が抜けない彼女。対する男性は、きっちり東京弁。そんな二人の行く末は……。

博多弁の女

夜も午後10時をまわったころ、中野坂上の交差点で一組の男女が手を上げ、タクシーを止めた。美人とイケメンのカップル。年齢は男は24歳くらい、女は23歳くらい。二人がタクシーに乗り込んできたときの雰囲気から、タクシー・ドライバーは、男女、どちらかのアパートに向かうんだろうと予想した。タクシーは、山手通りから環七へ向かい、さらに道幅の狭い商店街を抜けて住宅街へと入って行った。しばらく行くと、女が一人で降りた。

「やあ、また明日ね。遅れなかように！」

と、女は博多弁で男に一言残して、住宅街の路地の奥へと消えて行った。上下黒の服装ですらりとした体系。一見、隙のない女に見えるが、しかし、話す言葉は博多弁。女性の博多弁というのは、どこことなく情緒があて、魅力的だ。それまで二人は会社の同僚の話や仕事の話などを、落ち着いた雰囲気で話し合っていた。タクシー・ドライバーも、“間違いなく、二人で降りるだろう。メーターが伸びなくて残念”と、あきらめていた。ところが女は、一人でタクシーを降りた。タクシー・ドライバーは、男に話しかけた。

「女性の博多弁って、いいですね」

「そうですね、僕も好きです。彼女とは、郷里が一緒なもので」

「お客さんは、ほとんど東京弁ですよ」

「彼女は、なかなか博多弁が抜けないように……」

そう答える男の雰囲気から、滅多にないことなのだがタクシー・ドライバーは、つい、男に一言いってしまった。

「どうして、一緒に降りなかったんですか？」

男は、力のない小声で答えた。

「うん」

「ええ？ てつきり二人、一緒に降りるものだと思ってました」

タクシー・ドライバーは男に“余計なお世話だ！”と、怒りを買

いかならないと思いついながらも、つい一言。それに対して、男は、

「僕も、そう思います」

やはり、力のない男の声。

「だったら、男は“押しの手”ですよ」

「そうですか。押し倒すんですか」

「そうですよ」

「僕も、そうしたいんですけど……」

煮え切らない男の反応に、どうもタクシー・ドライバーは納得が
いかなかった。

九州男児がタクシーを降りたとき、女が降りた金額の2倍になっ
ていた。

雪の京都へ（前書き）

転勤してきたご主人について、京都から東京へ越して来たという新妻。タクシーの中で京都の話に花が咲く。車の外はこの冬一番の寒さという東京のビル街。思いは、“今年は雪が多いんです”という京都の街並みへ……。

雪の京都へ

その人は、湯島の天神下交差点で、手を挙げた。タクシーは、静かに彼女の側へと寄って行った。乗車した彼女は、キャリーバックを足元に置き、行く先を告げた。

「東京駅の日本橋口へ」

少し、関西なまりのある口調で、タクシー・ドライバーへ告げた。「東京駅の日本橋口」は、比較的新しい東京駅の入り口である。駅の利用客の中でも新幹線を利用する客の間で、人気が出て来ている。新幹線の改札口まで一番近いということが、一番の理由だ。

神田駅界隈の外堀通りを走りながら、タクシードライバーは言った。

「今日は、警察官が多いですね」

その日、100メートル置きくらいに、道路の両側に警察官が立っている。

「そうですね。誰か、外国の要人が来てましたっけ？」

と、彼女。今度は、それほどなまりが感じられない。それまで、ずっと黙りこくっていた彼女が、急に話始めた。

「私、結婚してすぐに主人の転勤で京都から東京に越してきたんですけど。京都には御所とか、いろいろあって、そこへ陛下が来るときとか、警備はものすごいですから。“その傘、閉じてください！”って、傘まで閉じさせられますから」

「それはすごいですね」

そして話は、いつしか「祇園祭り、時代祭り」へと。

「地元の人で子供たちにお祭りを見せに行きたいときは、祇園祭の時は、宵山のヨイヨイヤマくらいのと看に見せに行きます。その方がすいてますし、ヨイヨイヤマでも山鉾も見れますしね。当日は行っても、見物客の頭しか見えませんか」

「そうですね」

「当日は、クーラーのきいた家の中のテレビの前が、特等席ですわ」
「そうですね。でも、祇園祭とか、いいですよ。よく小説で、
“祇園祭のお囃子が耳について”とかって、ありますけどね」
「お囃子の練習の音が聞こえてくると、“いよいよ夏がくるなあ”
と思いますからね……」

「今年の京都は雪が多いんですか。“京都の底冷え”っていいですよ。寒いでしょうね」

「そうですね。もう、新幹線の駅に降りたときから、空気の冷たさが違います」

ひとしきり冬の京都の寒さの話で盛り上がったころ、タクシーは東京駅日本橋口に着いた。日本のいろんな場所へと向かう人々が集まっ来て、駅構内は利用客で込み始めている。

「お釣りは、結構ですわ。心ばかりですが」

彼女が京都なまりで、そういうと、キャリーバッグを引きながら日本橋口の乗客の渦へと吸い込まれて行った。彼女を見送ったタクシー・ドライバーの脳裏にいつしか、“コンコンチキチン、コンチキチン”と、祇園祭りの金の音が、遠く近く聞こえて離れなくなっていた。

ロンドンから中野坂上へ（前書き）

ロンドンでの生活経験のある二人。話題もロンドンの生活で盛り上がって。新たな物語の舞台は、東京の夜空にそびえ立つ高層ビル群を望む大都会の一角、中野坂上……。

ロンドンから中野坂上へ

「ロンドンのどのあたりに住んでたの？」
女性が男性に語りかけた。

「……」
男性の声は、寒いのに酔い覚まして開けた窓からの騒音で、聞こえにくい。

「そう。じゃあ、結構、近かったんだ。私の住んでたフラットには、今も私の友達が住んでる」

「……」
「インターネットの回線の料金、まだ、私が払ってるの」

「……」
「ロンドンには、会社の経費で留学してたんだ、いいなあ？」

「生活費の全部を会社持ち？　すごい！　今住んでる所も会社持ち？」

「……」
「そうだろうね。さすがに、日本での家賃まではね。でも、手当とかあるんですよ」

「……」
「今の仕事、面白そうだもんね。私も、がんばんなきゃ。でも、ロンドンで生活して、私、かなり性格が変わったの！　私の以前を知っている人には、“性格、変わったよ”っていわれる」

「……」
「“明るくなった”って。以前の私、暗かったの、本当よ！　へへ

へッ」
「……」
「……」
「もつすぐ？　あれッ！　すごいー！」

「本当！」

「……。運転手さん、その信号を渡った所で……。止めやすい所で
けっこうです」

タクシーは、交差点を渡って、横断歩道の少し先で止まった。

「……………」

女性の声が、急に小さくなった。代わって、男性の声。

「ありがとうございます。あっ、領収書。どうも」

二人は中野坂上の交差点の近くにあるマンションのエントランス
へと、歩き始めた。新たな物語の舞台は、東京の夜空にそびえ立つ
高層ビル群を望む、大都会の一角……。ロンドンから中野坂上へ。
二人にとって人生の新たなステージの開幕……………。

あなたの面倒を見れるのは、アタシしかないよ（前書き）

タクシー・ドライバーに「今の女と結婚するんです」と突然語り始めた男。その男の話とは……。

あなたの面倒を見れるのは、アタシしかないよ

多少のアルコールも手伝って客は、タクシー・ドライバーに語りかけた。年齢は25、6歳くらい。短髪だ。

「今、一緒に暮らしている彼女と、結婚しようかと思ってるんです」「おめでとうございます」

「実は彼女に、“あなたの面倒を見れる人は、アタシしかないよ”っていわれて、ぐっときて……」

「いいですね。“この人のためなら、どんな苦労も耐えてみせる”っていう、そんな女の決意が伝わって来ますよ」

「そうなんです。実はオレ、彼女と暮らす前は6人と同棲してたんです」

「6人ですか、それはうらやましい。一人当たりの期間は？」

「大体、半年から1年くらい」

「モテルんですね」

タクシー・ドライバーがうらやましがると、男は少し間を置いて、話を続けた。

「実はオレ、小学校のころ、発想を変えたんです？」

「発想を変えたって……？」

「顔のいい男は、それだけでモテルじゃないですか。でも、オレはかつこよくない。それなら、しゃべりでモテようと思って、とにかくしゃべりを研究したんです」

「そりゃあすごいですね。確かに、しゃべりでモテル男はいますからね」

「本当に、それ以来、人生が変わりました」

「やあ、うらやましいですね。でも、どうして次から次へと、女と別れたんですか」

「オレの我まま。それにオレ、女にすぐにお金を借りちゃうんです。で、実際には、ほとんど返したことはないし。そんなだから、“お金

にも女にもダラシナイ” って、女の方から去って行って……”

程なくして、男の、いや、女のアパートの前に着いた。男がタクシーを降りよとしたとき、タクシー・ドライバーが彼に一言いった。
「がんばって。彼女を大切に！」

「ありがとう」

と、男は一言残して車を降りた。降りぎわに見せた男の瞳は、“凍り付いた女の心を一瞬で溶かす” ような、温かさを持っていた。

落合南長崎 「あのおじちゃん是谁なの、ママ！」（前書き）

倒れ込むようにして、タクシーの後部座席に横になった彼女。年齢は30歳くらい。目的地に向かう途中、保育園で小さな女の子を乗せ、再び目的地へと向かったが……。

落合南長崎 「あのおじちゃん是谁なの、ママ！」

その人は、都営大江戸線「西新宿五丁目」の地上の出入り口の近くで、手を挙げた。ドアを開けたタクシーに乗り込むなり行き先を告げると彼女は、後部座席に倒れこむようにして横になった。行き先は、「落合南長崎」。タクシーは方南通りから山手通りを右折した。

「すみません、運転手さん。ちょっと一カ所、寄りたい所があるので、そこを左折してください」

そういわれてタクシー・ドライバーは、ハンドルを左に切った。

「その路地を入れてください。その先に保育園があるので、その前でしばらく待ってもらえますか？ それから、今来た道に戻るの、方向転換しておいてください」

タクシーは路地の途中にある保育園の前で彼女を降ろすと、タクシーの方向を変え、道の端に車を寄せてハザードを出した。通りになくなった路地のタクシーの脇を、幼児用の補助座席を付けた自転車が2台、3台と通って行く。

3分も待っただろうか。その人は、小さな女の子の手を引いて戻ってきた。女の子を先に乗せ、自分も後部座席に納まった。

「お願いします」

そういわれたタクシーは、再び山手通りに出て目的地を目指した。

「ひなちゃん、ごめんね、遅くなっちゃって」

「ひなちゃん」と呼ばれた5歳くらいの女の子は、元気よく答えた。

「大丈夫！」

「ひなちゃん、ママね、具合が悪くて何度も電車を降りたの。晩御飯は、おうどんがいい？」

「ひなねえ、保育園で、ご飯を食べたの」

「ええ？ 補助食を食べたの？」

「ううん。御飯」

「ええ？ じゃあ先生が、ママが体調が悪いことを聞いて、ちゃんと晩御飯を食べさせてくれたのかしら。ひなちゃん、晩御飯を食べたの？」

「そう、ご飯、食べたの」

「ひなちゃん、晩御飯を食べたの？ それとも、非常食を食べたの？」

「ご飯、食べたの」

女の子の話は、要領を得ない。晩御飯を食べたのか、補助職を食べたのか、結局わからない。しかし、二人の会話の中には最後まで、「パパ」の一言は出てこなかった。

程なくしてタクシーは、一軒のマンションのエントランスの前で止まった。

料金を支払ってタクシーを降りる女の子にタクシー・ドライバーは、

「バイバイ！」

と、声を掛けた。少女は、不思議なものを見るようにタクシー・ドライバーを見た。

「ほら、バイバイは？」

と、体調の悪いママに促されても、きよとんとして、タクシー・ドライバーを見つめる少女。

ママに手を引かれながらマンションのエントランスへと消えていく少女の瞳は、

「このおじちゃんは、誰？ なぜ、ママとお話したの？ なぜ、ひなに“バイバイ”って、言ったの。もしかして、このおじちゃん……？ そんな、そんなこと……。ねえ、ママ！ あのおじちゃん、パパなの！」

と、心の叫びを小さな瞳が、必死に訴えていた……。

ナンパ（前書き）

ナンパされて、そのまま結婚するなんて……、あると思います。

ナンパ

震災から一ヶ月ほどたったところ、東京も表面的には幾分、落ち着きを取り戻したよう見えたが、その傷の深みのほどは、わからない。ただ、人々の“活気を取り戻そう！”という気持ちは、みな同じだった。

日曜日の午前10時ころだった。明治通りから斜め左に新宿のホテル街へと入って行く路地に、タクシーが入った。一本目の路地を越えたころ、カップルの男性が手を上げ、タクシーを止めた。

男性の指示にしたがって、まず、女性が乗り込んだ。そして、男性もその後続くのかと思われたが、男性は、その場に残って、女性だけを車に送り込んだ。男性の声に従って、タクシードライバーは車を出した。

斜めの路地から区役所通り、職安通り、そして明治通りを左へとタクシーは走って行く。

彼女の行き先を指示する声に、わずかながらナマリを感じたタクシー・ドライバーは、自分のことを話したくなった。

「私は、富山の出身なんですよ」

というと、彼女は、

「そうなんですか」

と、興味ありげに、声のトーンを上げた。

「もう、東京に出てきて30年になりますけれども。大学時代に彼女ができてなかったら、多分、田舎に帰って就職してたと思います」

「それって、ありますよね」

「でも、結婚した相手は、学生時代に知り合った彼女じゃないんですけれども」

「ええっ！ それって……。人生って、そんなもんですよね」

「結婚した彼女は、新宿の喫茶店でナンパしたんです」

「ナンパ、ですか。その相手と結婚したんですか？」

ナンパした相手と結婚したということが、彼女には信じられないようだ。

「小田和正のあれですよ。“あの日、あの時、……”、っていう感じ」

彼女が歌詞の後を続けた。

「あの場所で君に会えなかったら”っていう、あれですよね”

「そうです。まさに、“キセキ”ですか」

「ふーん、ナンパで知り合って、その相手と結婚するって、本当にあるんですね」

「運命を感じます。カミさん以外には、考えられないっていうか。だから、カミさんとの出会いは、キセキだったと思ってます」

彼女の声のトーンがわずかにさがった。

「今の彼とは、あんまり……。なんだが……」

タクシーは程なくして止まった。料金を払って降りる彼女に、タクシー・ドライバーは思わず声を掛けた。

「キセキはあります。絶対！」

彼女は、そういうタクシー・ドライバーに笑顔を残して、午前中の明るい光の中へと歩いて行った。

女の変身セット一式(前書き)

昼間は地味なOLをしている、銀座のホステスの変身セット一式。
その変身セットの行方は……？

女の変身セット一式

東日本大震災から1ヶ月ほどたったころのことである。ある平日の夕方、25歳くらいの女性がタクシーを利用した。タクシーは、夕方の混雑し始めた幹線道路を、目的地へと急いでいた。そんな時、女性がタクシー・ドライバーに質問した。

「最近、夜の銀座で“震災特需”が、もう始まっているんです。それで、お客さんが多いと、私がタクシーの手配をしなくちゃいけなくなるんですけど。先日、それで困って。私、普段は地味なOLをしてて、夜だけ銀座でホステスしてて」

「そうですか。もう、銀座では“震災特需”が始まっているんですか」

「それで、ひとつお聞きしたいんですけど。よく、タクシーが捕まらないときに商社の人とか『裏の番号を知ってるから』といって、タクシーを手配する人がいるんですけど」

「ああ、よくありますよね、そういうの」

「で、“裏の番号”って、なんなんですか、あれは？」

「そうですね。通常、タクシーを呼ぶときは、配車の部署の電話番号でタクシーを呼びますよね。でも、慣れたお客様の中には、配車のための番号じゃなくて、その会社の総務の電話番号に掛ける方がいるんです。本来は、お教えしないんですけど、何らかの事情で流れたんだと思います」

「それなんですか。なるほど」

「でも、『おかけ直しただけですか』といわれることもあります。でも、実は、もっと確実な番号があるんです。それは、タクシーの運転手の個人の携帯の番号に直接電話するんです。これは、確実によくご利用していただいているお客様に、直接お教えしていることが多々あるんです。これは、確実です」

「ああ、それですか、裏番号って。きつと、それだと思います。う

ちの彼氏は商社に勤めているんですけど、たまに“裏番号”でタクシーを呼んでます。それだったんですね」

そこで、本来ならタクシー・ドライバーは自分の携帯電話の番号を教えるところなのだが、彼は教えなかった。“慎重”になっただけでも、“面倒くさい”と思っただけでもない。教えなかったのは、とどのつまり、仕事熱心でなかっただけなのだが。

「やっぱり。で、実は、ちょっと困って。それで、実は彼が呼んでくれたタクシーに乗って二人で帰るときに、私、荷物をタクシーの中に忘れたんです」

「じゃあ、すぐに見つかりますよ」

「でも、ちょっとまずくって。彼には、私が昼間は地味なOLをしてることを伏せてあって。実は、その荷物は、地味なOLの“変身セット一式”だったんです」

「それは大変だ。微妙ですよね……」

「そうなんです。いろいろ事情があって、昼間のことは彼には隠しているんで、その中身が彼にばれると、まずくって。今の運転手さんのお話だと、“裏番号”のタクシーの運転手さんと、うちの彼氏とは話が通じ合っている可能性が高いということですよね」

「まあ、そういうことが多々ありますよね」

「だとすると、忘れ物の中身が私のものだということが運転手さんにわかったら、絶対、彼に電話しますよね。逆に、私の方から言い出すと、もつとまずいですよね。墓穴を掘りかねないですよね……」

「そうですね……」
これは難問中の難問。タクシードライバーも返答に窮した。解決策は見つからない。やっぱり彼女として取るべき行動は、“沈黙”を守り通すのがベストなのかもしれない。後は、“裏番号の運転手”の気転に期待するしかないだろう。気まずい空気が車内に満ち始めたのを感じたタクシー・ドライバーが、気転を利かせて口を開いた。

「人生、収まる場所に収まるものですから、大丈夫ですよ、きつ

と……」

と……。ますます車内の空気が、暗くなった。

ダメ男、3番目の“B”（前書き）

二人の女性がタクシーに乗り込むなり、話し始めた。「最近私、ダメなの……」「そうだね」と慰める女友達。そして、車中の会話は、思わぬ方向へ展開……。

ダメ男、3番目の“B”

「私、最近、全然、だめでしょ」
「そうだね。そういう日もあるよ」
「どうしたら、この状態から抜け出せるんだろ？」
「そうだね。どうしたら、いいんだろうねえ」
「あいつ、あいつ！ 全部あいつが悪いのよ！」
「ホント ホント！」
「あいつに、“飲みに行こう？” って、メール送ったの」
「うんうん」
「そしたら、帰ってきたメールが意味不明。“今日は誕生日だから、前田も来るし、10時過ぎには行くよ！”。これって、意味不明！」
「ホント！」
「ただ、飲みに行こうって、メール送っただけなのに。“前田”って誰？ “誕生日”って、誰の？ なんで“10時に行く”のよ？ だから、あいつに“メール、意味不明！”って、送ったの。そしたらメール、返って来ない……」
「意味不明……」
「私、知ってたんだ。あいつ、私の友達とシチャッタこと」
「ええっ？ どうして、わかったの」
「回りまわって、私の耳に入ったの。なんで、あの子なのよ。そりゃあ、酔っ払って、そうになったらしいけど。でも、あの子には彼氏がいるんだよ。それなのに……」
「酔った上でのことね」
「でもね。その後、ふたりに洋服を見に行ったりとかしてるのを、目撃されてるの」
「……」
「それだったら、どうして、その相手が私じゃないのよ。酔っ払って、私を誘って欲しかった！」

「はあつつつ……」

「先輩が言ってたんだけど、“ダメな男、3大B”って言うのがあ
るらしいの」

「ふむふむ」

「ひとつ目の“B”は、“美容師”。二つ目の“B”は、“ベーシ
スト”」

「ふむふむ。私は、“ベーシスト”に限らず“バンド・マン”でも
いいと思うけど。で、3番目の“B”は？」

「わからない。先輩が、忘れちゃったの」

「なんだろうね、ダメ男の3番目の“B”って……」

タクシー・ドライバーの記憶は、そのポイントで機能停止状態に陥
ってしまった。そこから、二人の会話の細かなディテールは欠落
している。ただひとつ、“ダメ男、3つ目のB”だけが、記憶装置
の中でリピートされ、そこから進まない。

ついに“掟”を破って、タクシー・ドライバーが二人の女性に声
を掛けた。

「すみません。もうすぐ、目的地なんですけど……」

「はい？」

二人の乗客は、声をそろえて、返事をして来た。

「ダメ男の三番目の“B”は、何なんでしょう？ 今晚、気にな
って眠れなくなりそうで……」

友達の女性が増勢してくれた。

「そうですね。気になっちゃいますよね」

言った本人は、

「先輩が忘れちゃったもので、わからないんです。わかったら、お
伝えします」

「そうですね。よろしくお願いいたします。もし、再び出会えたら
「はい！」

と、返事は再び同時だった。

まもなくして、二人は目的地で、

「確かに、気になりますよね。また会えたら……。それまでに調べ
ておきます」

「よろしくお願いいたします。私も、努力してみます」
と、いって、その場はお互いに別れたのだが……。

あなたは、変わった（前書き）

先輩に呼ばれて急遽、タクシーで駆けつけることになったホスト。そこへ、お客の女性から、「一緒にご飯、食べに行かない？」と誘いの電話。「今、先輩に呼ばれて、タクシーで駆けつけるところ」と、せつかくの女性の誘いを断った男。ところが、本当は……。

あなたは、変わった

男は、タクシーを止めた。タクシーのドアが開いた。

「すみません。N大前駅まで、いくらかかりますか。5000円以内で行きますか？」

タクシードライバーは、ドアを開けたまま、カーナビで距離を見た。

「大丈夫です。大体、〇〇円です」

「そうですか、ちょっと待っていてくれますか？」

「はい」

タクシードライバーが、そう答えると男はいったん、マンションの中へ消えた。程なくして男が戻ってきた。

「お願いします」

タクシーがスタートした。タクシードライバーが言った。

「N通りを走りますけど、いいですか？」

男は「はい」と答えがた、力がない。そして、すぐに携帯電話をかけた。

「うん。N通りでいいの？ ええっ、H街道？ 一方通行？ 運転

手さん、H街道ってわかりますか」

「はい」

「H街道の一方通行は？」

一方通行は沢山ある。要領を得ない。とりあえずタクシードライバーは、男の話を受け流して車を「N大前」へと向けた。タクシードライバーが、男に聞いた。

「なんでしたら、住所で行きますけれども？」

「ああ、そうですね。あのね、住所は？ 運転さんが住所で行ってくれるって」

男は携帯電話に、話しかけた。

「住所は、練馬区〇×のZ W Yです」

「わかりました」

タクシードライバーは、カーナビをセットした。車は一路、入力された住所へと向かった。

切った男の携帯が、しばらくして鳴った。

「うん。今から？ 無理だよ。どうしてって？ 今から先輩に呼ばれて、先輩の家に行かなきゃ行けないから」

女からの電話のようだ。

「だって、メール送ったのに、返ってくるのが遅いんだもん。だから、ちよつと無理だって！ ごめんね」

タクシードライバーが、男に声をかけた。

「お客さま。モテルんですね。“モテキ”ですか？」

「そんなことないです。今は、お客。俺、ホストしてるから。お客が飯と一緒に食おうって」

「じゃあ、ホステスだったら同伴出勤というところを断って、先輩のところへ今から？」

「“先輩”は嘘。本当は、本命の彼女の家に行くの。最近彼女、引越して……」

「あはっ！ そりゃあ、失礼しました。なら、ホストでモテルでしょ？」

「でも俺、あんまり興味ないから」

「ええ？ 今は彼にとって、“モテキ”の真っ最中！ でも、草食系ですか？」

「そうかも。でも、どちらかというと本来は肉食系なんだよ」

タクシードライバーが脇道から街道へとハンドルを切った。後は、一本道で目的地まで行ける。

「それって？」

「なんていうか、本当にかわいい女だったら“やりたい”と思うけど、たいていは、どうでもいい」

「ええっ？ もったいないですね。私なんか、手当たりしだいでしたけど」

「そんな感じですよ。今もガンガンですか？」

タクシードライバーの脳裏を、往時の映像が溢れ返った。

「そんなことはないですけど。でも、本命の彼女はホストの彼のひと、なんと言ってるんですか？」

「俺、ホストをして2年で彼女とはそれ以前から付き合ってた。で、彼女はタレントなんだけど」

「ええ？ そりゃあ、すごいですね。で、彼女は？」

「あなたは、変わった」って言ってます」

「それは、ホストをやるようになってから、ということですか？」

「そう」

「どう、変わったと？」

「まず、お金ができた」

「そうでしょうね。それから？」

「なんて言ったらいいか……。灰汁あくが抜けたみたいとか……」

「灰汁が抜けた？ ふーん。キラキラがなくなっただ」

「それって、“油が抜けた”じゃないですか？ でも、それもあるかな」

コンビ二の前に、すらりとした女性が立っている。

「お客様、あの方？」

タクシードライバーが、そういうと、男は笑顔で、

「ここで止めてください」

と、いった。

「かしこまりました」

タクシーがコンビ二の前で止まった。男は料金を払うと、女の方へ足早に近づいて行った。二人は寄り添うようにして、コンビ二の店内へと入って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9813i/>

ショート・ショート トキアンナイト 掟破り

2011年10月13日13時51分発行